心が有ると、個個分分が認めて居るのだとの意で、之を仮に「小宇宙の群中心」と呼ぶ。

ところで、近頃、世間の識者とか指導者とかは、「何でも彼でも上げてしまへ」と教ふること天理教にも増して居る。それは全全自己を捧げ尽せよと云ふのだから、勿論、自分の中心とか外廓とかには拘はることなく一切合切を一丸として、より大なる中心に帰入せよとの意である。すると、その大なる中心は更にまた、より大なる中心を仰いでそれに帰入する。その大なる中心はまた更に、より大なる中心を仰いで、と云ふやうに、我が身、我が心、我が物の都べてを捧げ尽す。すると、その究極に於て、我は明に中心の内なる我であることを知る。と共に、その中心とは、完全に全外廓を統べたる「カミ」であることが判るのである。此の「カミ」は斯くて対待が無いのだから、絶大無限であり極小零界である。従つて、中心本末の見(ケン)にとらはれては、之を知る由も無い。また単に、群小慣用の「中心」なる詞では紛はしい。そこで、特に「大中心」と称へまつる。此の「大」は大小と相対したのではなく、計算的の大小を超えたる「極」を指すのである。

此のやうな唯一絶対の「大中心」。それは即「カミ」にてまします。此の「カミ」たる「大中心」は必、全外廓を包含するのだから、大中心の活動はそのままに全躰の運用である。それで、漫然と相対的小我の見地に立てば「外廓の良くないのは中心の責任だ」などと云ふやうな、殺風景な責任論まで持ち出す小人さへ起つて小我の悲劇が演出される。

けれども、其のやうに、中心だ外廓だ全体だ分派だと別けて言ふのは、分分個個が各自各自の位置から観(ナカム)るからなので、本来は、まことに渾然たる唯一つなのである。

此の「ヒトツ」。それは、比べまつるものとては有らぬので、「天照大神」と称へまつるのだと、古語拾遺の伝

へたことを上来屢〻述べて来たのであるが、之を別の詞では、極大極小、極無極の「日神（ヒノカミ）」と称へまつり、其の御活用を仰ぎては、皇孫命（スメミマノミコト）の稜威ぞと畏みまつる。則、明津神にてまします。と、拝みまつるので、そこには唯、「捧げまつる」を知るのみである。「捧げまつる」とは活動である。何物でも動かぬものは無いが、特にその「ヒトツ」なる大中心を仰いでその規律の中に活動することを指すのである。そこには固より紛紛たる中心分派の観念などの有り得べきではない。

ところで、此の「大中心帰入の活動」を、人としての位置からは、出て来たところに帰るのだとの意味で、帰入と称するのだが、事実は、一円光裡の波瀾だから、原始と呼ぶとも、反始と称するとも、また共に此の義に当るのである。さうして、それは、人としての位置からは、上に升るので、善美正直を求むるので、「カミ」の完きが如くに完からんとするので、その人は静寧和平の愛好者で、天沼矛を仰ぎ三種の神器を戴き十種瑞宝を執佩くものである。

斯くて、その人はその身そのままに日隅宮を築き成すことが出来る。

その暁には、中心と外廓と、共に与に、一円晃耀の天御鏡たる事実を現し来る。

燃ゆる火の、燃ゆるともなく。行く水の、行くとも知らに。回り回る。五何新可本（イツカシガモト）。

第四節　完

第五節

「メグリメグル、イツカシガモト」

之を別の詞で、「十指両掌」と言ふことが出来る。神数の事理なので、「カズカズ」と呼ぶ。さうしてそれは、左と右とであり、左右を合せたるものでもある。「左を左とし、右を右として、その位置分限を正しくせよ」と、先聖の誡められた神理である。第三十三神界主神の秘言霊で、応化自在なるの妙数で妙音で妙象である。

之は、箇箇分分としての小宇宙を超越したる大宇大宙の秘で、全宇全宙一円晃耀の火で、本来本有の神身を現成したる凡夫身で、「神身魔同几の天御鏡」と称するのである。

分分個個は、その分分個個が、分分個個を築いて居ると想ふことが多い。けれども、それは、分分箇箇相互の境界に制せられて全宇全宙を観ることの出来ぬ為の管見なので、事実の全貌ではない為に、時に或は、甚しく誤解謬見に堕つることがある。

ところで、事実の全貌は、説くべき人間の詞が無いからとて、仮に、如是とか這箇とか呼び、それがそのままでは、人を導き世を教ふるとは云はれぬ為に、先聖は、之を「秘」と呼び「ヒメ」と戒めて来たのである。仏徒の戒律と言ふのも、猶太教、基督教、回教、等に於ける訓誡も、その本義は、此の秘数から出でて鬼畜の慾求を制御しつつ神国浄地を築かせようとせられたのである。

けれども、世人は、教への外形だけを見て、先聖の心に徹せぬ為に、誤解謬見に堕ちて尤も重ね罪を犯すものが多く、世道日日に晦く不祥の事の続出する現在世界と堕落したのはまことに悲しむべきの至りである。

ヨミドフク、マガノサワギテ。ネノクニハ。ヒツキモワカズ、アヤメナクコソ。

神魔交錯。日月出没、人天往返。鬼畜跳躍。

必竟、是くの如くであるから、常にもがもに神の恩恵を仰ぎまつらねばならぬ。

神恩でもなく神徳でもなく人の意の如くになるものとては何一つとして有るのではない。神命に依り神命を仰ぎてはじめて都べての活用は現はれる。一切の活動は、善悪も邪正も、是非曲直も、皆悉、神命に依つて発現するのである。それは何故と説明するまでもなく、唯一つである大宇宙とは、固より神であり神の有(モノ)であるからである。

が、さて、問題は次ぎから次ぎと、其処から此処と、誰から彼と、間断無く起つては消え、消えてはまた起る。それを、それぞれに処理することが、蓋、人間世界の教へである。それで、「大きな疑問を起すところに、はじめて大きな悟証が得られる」と、古老が教へて居る。ところで、先師は、一日、予の掌裡を覗き観て、「ひどく苦労の多い相だ。速く、お神様にお願ひして、取り除いてお貰ひなさい」と、お憐み下された。蓋、豎子、此の労苦に耐へて、相応の教門を開き得るものでない。と、諷し給へるものであらう。か。

先聖既に歿して後賢未現れず。寒房採暖の方を弁ぜず。炎天納涼の途を知らず。噫。

然り。然れども、轍鮒も雨を求めて止まざる一念徹すれば、時有つて旧泉に帰る。之を努めよ。と。

這は教でない。

這は種子である。委しく云へば、種子の種子の、その種子で、種子ならざるの種子と呼ぶべき「火」である。それは兎に角として、種子が無くては、物は成り立たぬ。と共に、種子は、土中に潜まねば、完全に発芽生育するものではない。この「土」を胞(エ)と呼び、兄(エ)とも書く。日本の古典は「淡路」と教へ、古老は仏盤とも称へ、湯と伝へたのである。

さて、その土中の種子にも「名」は有らう。けれども、その名を謳ひ褒め讃へよと、他(ヒト)に求むることは為ない

であらう。

此の種子を「日隅宮」に播いて、発芽生育するのを眺め楽しむのは、大国魂の秘神挂りである。

這が秘である理由は、上来略、説き得たと思ふ。若しまた会せざる者も、そのままで、次ぎに進まねばならぬ。言論文章の捕虜と成つてはならぬ。言語文字は、月を指すの指にほかならぬ。指にこだはり、指に囚はれ、指に迷つてはならぬ。筆者もまた、他の謗りを誉とする理由は無い。

第五節　完

第六節

暁を告ぐる太鼓の音は、国の内外に響き、曙の光は、天地を裹む。

大宇宙は一つである。その一つである日隅宮の比売神の大稜威は、世を照し人を導きて、神国浄地を築かせ給ふ。

此の宮を、数理観では、第三十五神界と称へ、三十五の零と教へて、春日比咩（ハルヒヒメ）の神の知ろしめします「火海（ヒノウミ）」である。

春日比咩の神と称へまつるは、燃ゆる火を取り、光る日の神代を築かせ給ふ三柱の貴子（ウヅノミコ）にてます。

あなかしこ。

神の代の栄光は涯ても無し。

その慈光限り無し。

烈烈たり。

赫赫たり。

而してまた、

穆穆たり。

ああ。されど、

人の世界は、鬼畜妖魔と離るることを能はず。否、人間以外の六道十界とては在らざるなり。然り。而して、

神、之を

「よし」と宣ふ。

美しさを求め、正しきを願ひ、善きを行はんと思ひ煩ふ人の子を、神また、

「よし」と宣ふ。

善か悪か、美か醜か、正か邪か。唯是、這の存続を願悃希求して燃えに燃ゆるなることをも。神また、

「よし」と宣ふ。

まことに、

這は教にあらず。

釈尊拈華。復、言説せず。

日本神道言挙げずして、神国築成せらる。

之を、第三十六神界主神の秘と称へて、宇宙完成の妙徳なり。大日本天皇国完成の秘儀また這の裡に備はる。

日本古典は、之を伝へて、「天沼矛」と称へまつる。その亦名（マタノミナ）また幾十百千。而して、之また、上来縷述せると

ころ。日少宮・日隅宮・の古伝また甚多し。

這は教にあらず。然りと雖

教は這にあらざるにあらず。

第六節　完

第七節

「零が結び結んで」とか、「火が燃えに燃えて」とか、「日が照りに照つて」とか、又は、「一が積り積つて」とか、色色に説明は別でも、結局、それは、「稜威の魂」の「産霊産魂」であり、その完成された暁を、「日少宮」と讃へ、神数観の上では、第三十六神界と称して、天津神の神座（カミクラ）である。

それを、日本古典は、伊邪那岐命が、伊邪那美命に、事戸を渡し、阿波岐原に禊された結果として伝へられたのである。之は、神代の神の御上であるが、人間身として見れば、此の身を清く明くして、此の身此のままに、神の身と成り得たのである。此の身此のままの神の身を築き成せば、それは則、天皇国の大御宝たる実を顕し得たので、人としての仕事は、此処に完成されたのである。

「天皇の稜威の中の我である事実を完全に顕現する」。

それは、平生無事の時には、気も付かぬ人が多いのであるが、非常時局に際会すると、外からの刺戟と、内からの覚醒とで、「大君の稜威の身」であることを悟つて、全身心を捧げまつる勇者と成るのである。

マスラヲノ、トルヤ。タマホコ。タママキテ。コヲロコヲロニ。ヒトムスブナレ。

よしや今。神の恵みの、厚からぬこともやあると、迷ふとも。また来る日をば、心して。いざ励まなむ。

人の世の道。

励み、励まし、相率いて、相互に、「大君の稜威の身」として、神国浄地を築く、

そのやうにして、その国の成り成る時、その人の生り出でし時、それを讃へて、「加牟（カム）」と呼ぶ。それは、日神の三田の賜物であり、三不可分の一である。三柱御祖神の神挂りであるとの意である。さうして、その神界が完成した時、それを、数としては、「三十六」だと云ふ。それは、累積し尽した大数だからなので、「一二三四五六七八九十」としての満数が、「ヒト」で、日止（ヒト）とも、火人（ヒト）とも、また、人（ヒト）とも書かれるのに対し、三不可分の一たる三重の一、即、「ミイヅ」を単位としての十は、神数としての三十六なのである、と云ふと、三の十倍ならば三十であらうと反問されるかと思ふ。

三の十倍は慥に三十で、此の三十なる「カミ」は、古典が、別天神とも、无方とも、陰陽不則とも伝へたるところ。之を、人間的の位置からは、仮に、三十神界と称するのである。之は、古典に所云「天地初発」で、「神界は未完成」である。それを、古典は、「水に浮べる脂の如くである」と記された。此の三十神界を制御し主宰する二柱御祖神のましまして、はじめて、宇宙は完成するのである。それで、古典は、「天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。次高御産巣日神。次神産巣日神。此三柱神者、並独神成坐而、隠身也。」「次国稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、如葦牙因萌騰之物而、成神名、宇麻志阿斯訶備比古遅神。次天之常立神。此二柱神亦独神成坐而、隠身也。」とて、宇宙構成の次序を教へられたのである。

その初は、天之御中主神・高御産巣日神・神産巣日神と仰ぐ三柱の十（カミ）である。之を、別の詞では、生産霊・足

産霊・玉留産霊・と称へ稜威三柱神（タマノミハシラノカミ）と仰ぎ、未、御身を顕はし給はぬのである。

「御身を顕はし給はぬ」とは、「極大極小の零界」との義で、大平等海である。それ故に、それを、「水に浮べる脂の如くである」と譬へたのである。それが、「許袁呂許袁呂邇画鳴され」結び結ぶ様を形容すれば、葦牙の萌え出づるにも似て居る。之は、「神魂（カミムスビ）であり、高魂（タカミムスビ）である」。此の二柱の十（カミ）が、宇宙主宰の神として、神界を完成するのである。がそれは、未、隠身にましますから等しく零の神である。零は零でも、此の位置に於ける零は、稜威三柱（タマノミハシラ）の陰陽（メヲ）の祖神である。それ故、数としては、三の二倍で、六で、六としての零である。□（ムユ）と画き、又、□□□□□□（ツ）□□□□□□（チ）とも画す。無にして有にして、非神非魔。それで、宇宙を完成するものは、「六の又六」であり、三十と六との和でもある。仍て。此の神界を、第三十六神界とも、三十六（シン）とも称へまつる。則、火中水裡一点昭昭の⊡で、春日比咩（ハルヒヒメ）の神（カミ）と仰ぎまつる。亦名　日神で、　三貴子にてまします。

古典は、日神御生誕の秘を幾通りか伝へてあるが、世人の読み慣れ聞き慣れて居るのは、阿波岐原の禊と、天窟開闢記とであらう。異域他邦の仏誕生記。旧約創世紀、基督生誕伝、等に就いては、また別に、解説の日があるであらう。

さて、その、第三十六神界の主神は、二柱御神とも、三貴子とも、造化三神とも、数多の御称号が太古以来伝へられてある。が、兎に角、三十六で完成した神界は、また、三十七から一つ一つと数を増す毎に破壊されて行く。

行く水の、行くがまにまに、行き行きて。行きのはてなく、行きなづみたる。

之を、第三十七神界主神の秘言を称へ、無限ならざる有限で、零ならざるの一で。終りの始めで、一音に称

へては、「シ」である。それは三十六で結ばれた神界が、破壊されながらも、やがてまた結び来たるべき種子なのである。此の種子が有るので、人天万類は、生死関頭を縦走横馳しつつも、安心立命し得るのである。

日本天皇の古典は、之を「穂（イナホ）」の伝として教へ来られた。その「イナホ」は、いとも醜く穢き物を摂り集めて、そこに、天津日の御光を仰ぎまつれば、不思議にも、その醜悪汚穢のものが変じて、善を尽し美を極めたる資材として、人の身を養ひ、神の心を和らげ、万有の命（イノチ）と成るのである。此の事理を、天照大御神には、天孫降臨の勅としてお授けになられた。それを、日本書紀には、「天照大神（アマテラスオホミカミノリタマハク）勅曰。以吾高天原所御斎庭之穂（アガタカマノハラナルユニハノイナホモチテ）。亦当（アガ）御於吾児（ミコニヨセマツレ）。」と記してある。

之を飜訳すると、「此の穂（イナホ）は、神から人に、親から子に、次ぎ次ぎに際限無く継続して、醜きものを陽（アカ）く美しく、悪しきものを善く正しく、濁れるものを清く精しく、養ひ育てて、神の代の高天原に、神と成らしむる種子（ミイノテ）であり、瑞宝（ミタカラ）である。」となる。

之は、斎庭の秘事で、宇宙成壊の事理を教へ諭されたのである。その斎庭とは、神斎る祭りの庭である。それは、神の御位置から神を斎る神事との義で、それが則、「穂」の行事である。「庭」とあるから単に客観的の場所とのみ思ひ誤るかも測られぬ。けれどもその「庭」には、庭の主観が有り、また、主客合観が有る。場所として客観しただけでは、物であるが、その物は、何如なる物でも、必、存在すると共に活動して居るので、そこに主観が有る。それは則、心である。物であると共に心である。其の「物であり心である」ものを合せて観れば、中枢で、「神」と呼ばるるのである。此の神が、神ながらに、別れては会ひ、遭ひてはまた別れ、往きては返り、来ては去る。それを「ユニハ」と呼ぶ。その「ユ」は、従（ヨリ）であり、湯である。「天ヨリ地ヨリ。彼ヨリ此ヨリ。

火ヨリ水ヨリ。乾ヨリ湿ヨリ。雌ヨリ雄ヨリ。陰ヨリ陽ヨリ。」等の「ヨリ」で、其の妙用は「湯」で、人としての位置から云へば、「日に新に、日に日に新に、又日に新」なのである。「二」は、煮で、似で、熟で、和で、仁で、二で、相倚り相助けて、神界楽土を完成するの義である。「ハ」とは、葉で分派分出で、子女たる芽である。出でて窮まらず、流れて尽きざるものである。此のやうな「ユニハ」とは、神子産出の胎で、神人長養の資材であり、やがて又是「神」である。之を「ミトシスメカミ」と畏みまつるのは、創造建設の神徳を讃美しての御名で、天真名井の「ミモヒ」たる水神（ミヅノカミ）にてまします。此の水神を、裏から拝みまつれば、破壊を司る第三十七神界の主である。が、日本の古典には、その教へが無い。支那には、之を「坎」と伝へ、禹の治水と表裏して、破壊と建設との分岐点を明示してある。

破壊の水を「坎」と教へたのは、科（アナ）の義で、包犧氏が 𠀤 と描いて、二陰が一陽を姦するもので、人間世界の終末を指示したので、人と禽獣虫魚との区別は、唯此の一線の境に依るものであることを知らしめたのである。

「唯此の一線」「線無きの線」。之を「黄泉比良坂（ヨモツヒラサカ）」なりとは、復活の面より教へたる日本古典の神伝である。

此の一線を境として神界成壊の秘事が行はれる。その数理は、固より秘数であるから、細説を憚るが、その数字の一端を並べて置かうならば、先、零。次ぎは一。それから三十六・三十七。四十四・四十九・五十。その次ぎは五十有五で、天地の数だと伝へてある。之は、祖神の教へ給へるに依りて、包犧氏が伝承したのである。

第七節　完

第八節

建設の裏を観れば、そのまま破壊であり、破壊の裏は、直に建設である。之を観る位置を変へれば、同一事実が、そのまま破壊と呼ばれ、建設とも云はれ、生とも死とも、起滅とも、往返去来とも名づけらるるのである。

ところで、古典に、「水に浮べる脂のやうだ」と形容された「高天原」には、まだ此の「位置」が定らない。唯一円の光のみである。

その位置を定めるのは、「天沼矛（アマノ）」で、その位置は、「天御柱（アメノ）・心御柱（シンノ）」である。天沼矛の神事に依つて、天地万有の位置が定まる。

さてその「位置」の未定らざる「高天原」とは、「天地初発之時。於高天原成神名。」と記されてあるので、勿論「境地」である。ところが、その「高天原に成ります神、天之御中主神・高御産巣日神・神産日神」と伝へてある為に、此の「成神」の二字が禍して、高天原の主神が天之御中主神であるかの如くに思ひ過るものが多い。けれども、次ぎに、「独神。隠身」とあり、更に、「別天神」とあるから、之は、明に零なる神である。零神は、高天原なる境地の超絶観とでも云ふべき意味に於ての神なので、換言すれば、神ならざるの神で、天神地祇と別つべからざる隠身で、即、独神にてましますのである。之を「ヒ」と称へまつる。

此の「ヒ」の神は、三柱でそのままに一柱にましますところの「稜威（ダイ）」で、三不可分の一と説明せらるる極底最下の一で、極大無限の一で、未、宇宙を成さざるの宇宙である。

宇宙を成さざるの宇宙とは、則、無宇宙で、「無」である。けれども、万有を産出する上からは「有」でもあ

る。

無としては、隠身なる「零」であり、有としては、独身なる「一」である。さうして、それが共に、参神なる「天之御中主神・高御産巣日神・神産巣日神」である。然しながら未、位置の確定しない零境だとの証左は、国稚く、水に浮きておる脂のやうだ」と記されたことである。

さうして、それが「萌えて宇麻志阿斯訶備比古遲神・天之常立神と成られた。」それもまだ、隠身であり、独身であり、別天神にてまします。之を別の詞で言ふならば、一円平等の火海で、海月の如く捕捉へどころが無いと形容されるのである。

位置がまだ定らないから、国は出来て居ない。

それを、別の古典は、「天地と剖れず、陰陽とも分れぬ。」「雞卵子のやうで、どちらとも判別が著かぬ。」「それがやがて、開け闢け剖れ割れて、天と成り地と成り、陰とも陽とも成つた。」「すなはち、天譲日天狭霧と国禅日国狭霧との二柱であるところの天祖で、」「生み産みて、日月星辰、山川草木、尽天尽地、宇宙万有を生成化育し給ふ伊邪那岐命伊邪那美命二柱御祖神と成り出でられたのである。」

それで、此の「御祖神は、天浮橋に立たして、天沼矛の秘事に、シホツチの産霊・産魂で、万有と生り出でられたのである。」

其の生み成し給ひ、成り出でますからには、必、其の位置が定る。其の位置の上下向背に依つて正邪曲直善悪美醜の異別がおこる。それを、古典は委しく教へ、堅く誡められたのである。「二柱神が、国をお生みなさるとて、陰神から先に、お声を挂けさせられた。すると、目的とは反対に、水蛭子と成つて流れ失せた。そのやうな

のは、他の資料に供せらるるまでで、独立性が無いから淡嶋と呼ぶのである。淡嶋であり水蛭子である物は、神の子でも人の子でもない。」「此のやうな物の出現。それは、陰陽の位置を紊した為に起つたのである。陰は卑(ヒク)く、陽は尊(タカ)いのだから、此の次序に順はねば、何事も成立しない。」「天神の詔せらるるには、天が上に在り地が下に在るやうに、男女尊卑の位置は定つて居る。それを紊しては、国の成り立つものでない。」そこで、「二神は悔い改め、位を正し言を正しくして、茲に、国も嶋も八百万の神も、美しく産み成されたのである。」

位置を正しく、
言語を正しく、
行為を正しく、

茲に初めて、物が出来、国が成り立ち、神が生れます。

神の知ろしめる国は「神国(カミノクニ)」で、火も焼くこと能はず、水も溺らすこと能はず、刀杖砲弾も破壊することが出来ぬ。先聖は、是を「大倭豊秋津根別(オホヤマトトヨアキツネワケ)」と教へられたのである。

カミナガラ、カミノクニヲバ、キヅキナス、正シキミチヲ、瑞宝(タカラ)トゾ知ル。

天音琅琅、珠玉珊珊。尽天尽地。一円一音。

以上　昭和二十年五月七日　正午　浄写し畢る

天地の宇気比　終

もみぢばの　散るをあはれと、里の子が　かきわたしたる　をどのしがらみ

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章　終

第八章　少彦の協力

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。
日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂の神の御子に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遅神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとすれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を飜して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

理寧和平ならしむることは、所謂「毒を以つて毒を制する」のではなく、「毒を変じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変る」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のままで分量と時間と空間とに適応させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に悪を善に邪を正に転換させるので、用ゐ方とか使ひ場所とか使用の時とかに関はるのではない。「神音を称へ神象を画き神数を算む」。すると、禍津毘と呼ぶところの醜悪邪曲が極底最下の火と化して根堅洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に称へる秘詞とは神音であり、行事中に画するは神象であり、斎部の算むは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・気吹戸主・速佐須良比咩の神座が成立する。それは則、日若宮で、日隅宮で、⊙である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらざるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算んで「イ」となし之れを詠ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出没浮沈三悪道。顧望一夕冢間煙。

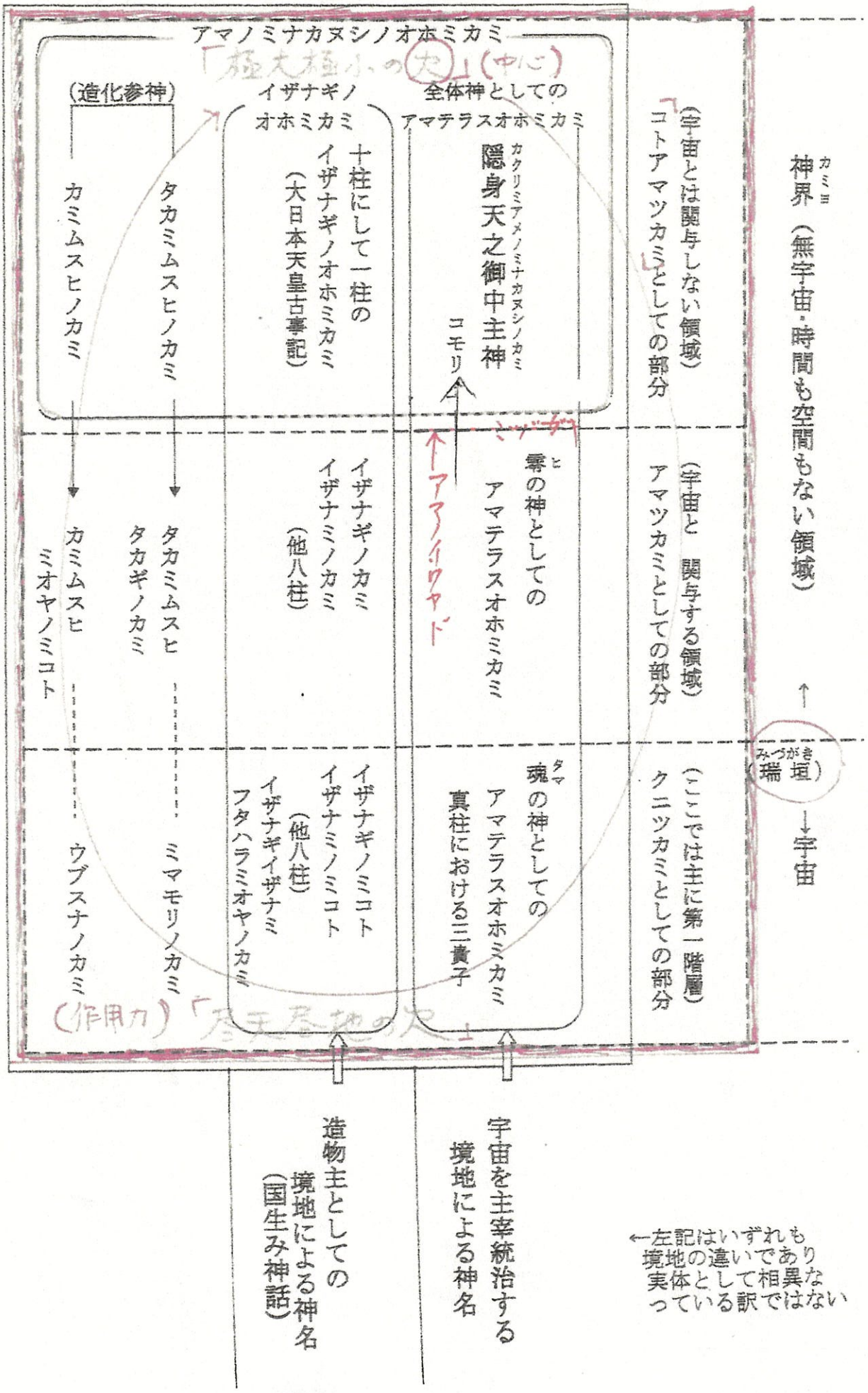
立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

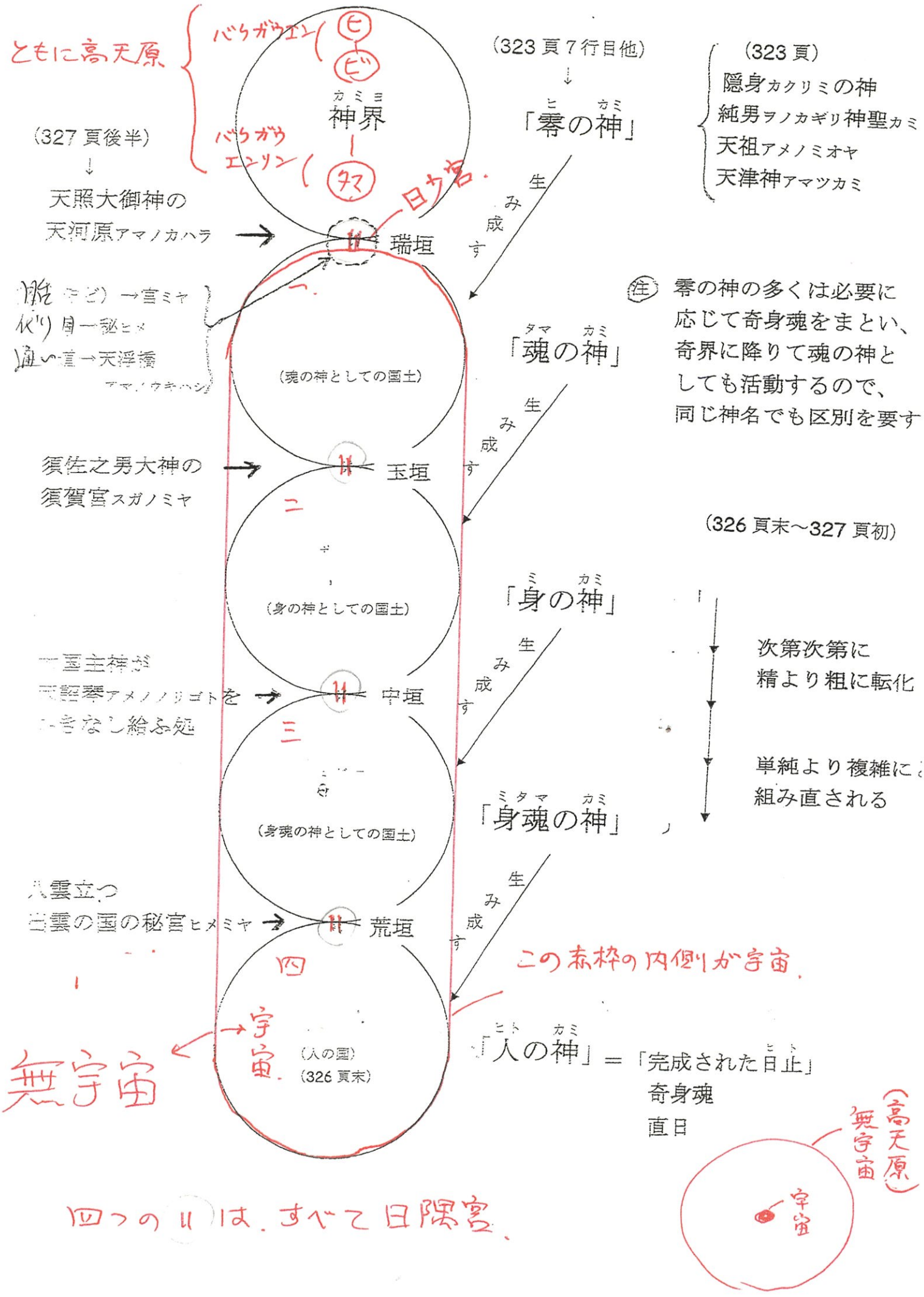
天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

第八章　終

オホミカミ（全体神）の一覧
（タカマノハラの構造）

多田流　オホミカミ（一）（二




ともに高天原
バラガウエン
ヒ
ビ
神界
カミミ
バラガウ
エンソン
ダ
日ウ宮.
(323頁7行目他)
↓
「零の神」
ヒ カミ
(323頁)
隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマツカミ
(327頁後半)
↓
天照大御神の
天河原アマノカハラ
瑞垣
生み成す
(注) 零の神の多くは必要に応じて奇身魂をまとい、奇界に降りて魂の神としても活動するので、同じ神名でも区別を要す
(魂の神としての国土)
「魂の神」
タマ カミ
須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ
玉垣
二
(身の神としての国土)
「身の神」
ミ カミ
(326頁末〜327頁初)
次第次第に
精より粗に転化
中垣
三
(身魂の神としての国土)
「身魂の神」
ミタマ カミ
単純より複雑に
組み直される
八雲立つ
出雲の国の秘宮ヒメミヤ
荒垣
四
この赤枠の内側が宇宙.
宇宙.
(人の国)
(326頁末)
無宇宙
「人の神」=「完成された日止」
ヒト カミ
ヒト
奇身魂
直日
(高天原)
無宇宙
宇宙
四つの 〃 は、すべて日隅宮.

零で一で、無より生ずる有としては、火と呼び、無に歸する有としては、日と称へ、日少宮と傳へ來つたのである。

之を祕宮とか天浮橋とか称へまつることは、人間身として知り得ざる奇靈（くしび）であるからでもある。

古典に、「天浮橋に立たして美み見たまふ」と傳へたる神は伊耶那岐命、伊耶那美命、二柱神としても、天忍穗耳命としても、いづれも共に、新しき國土を生みなし給はんと、御準備遊はさるる時なので、零（ヒ）の神が、魂（タマ）の神としての國土を生み成す時、魂の神が、身（ミ）の神としての國土を生み成す時、身の神が身魂（ミタマ）の神としての國土を生み成す時、また、身魂の神が、人の國を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと轉化し、或は、單純より複雜に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを、「祕（ヒメ）」と呼び、その胎（やど）を「宮（ミヤ）」と称へ、その通ひ道を「天浮橋（アマノウキハシ）」と仰ぐのである。

そこに拜みまつる神は、「産土神」（ウブスナノカミ）」で、その宮を「日隅宮（ヒスミノミヤ）」と称へて、大國主神の神治らすところである。

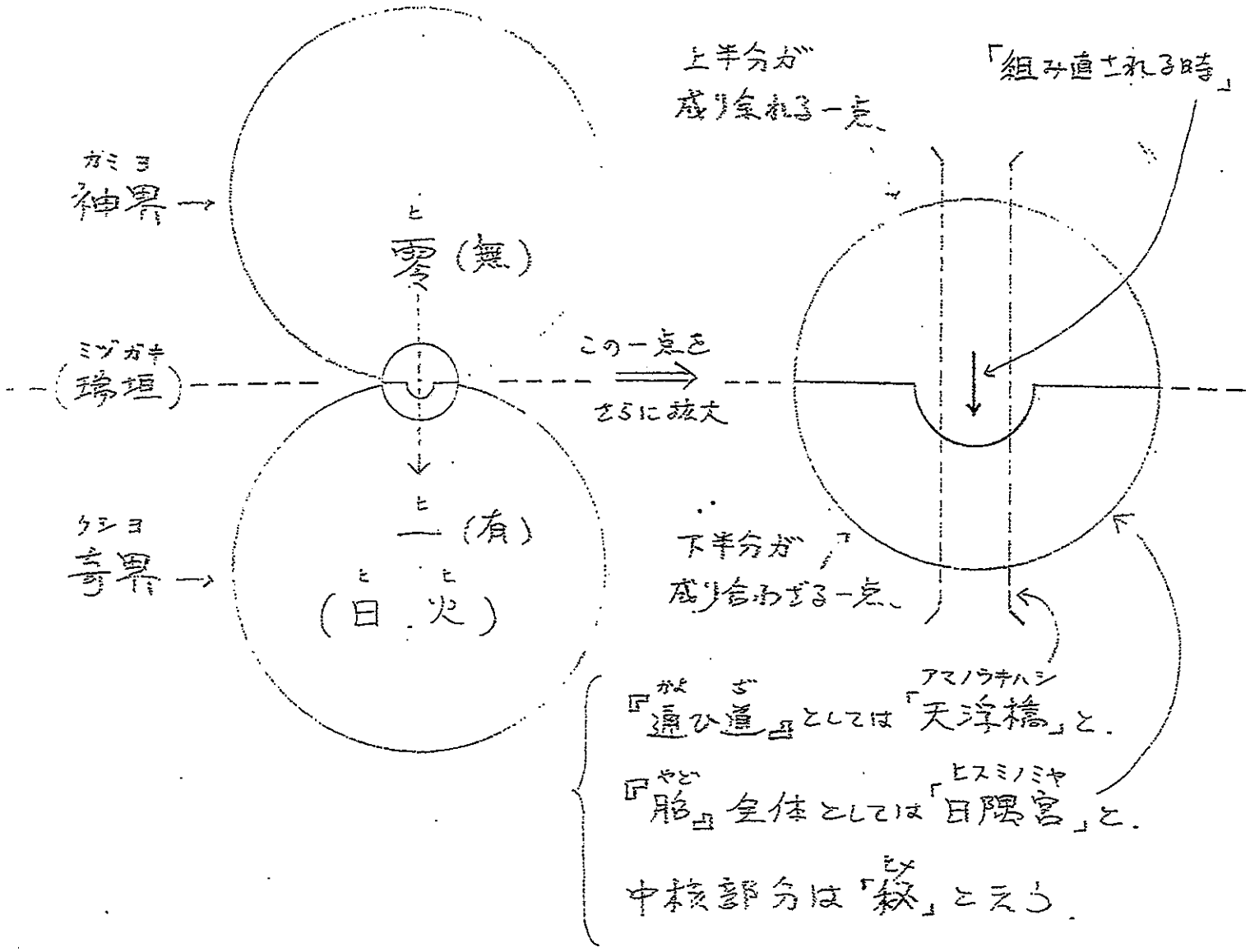
前に述べた如く、世の大人を造る道に「ミソギ」の祕事がある。

それは、人の身が、「神の宝氣昆（カミノウケビ）」を得て、此の身此のままに、生を代へるので、その時の此の身をもまた「日隅宮」と称するのである。

冀はくば、我等凡愚の身も、何うか其のようにして、神の都を拜みたいと、

図表23 『接触面たる一点』即ち『国を生み生す零』の拡大図

(76頁、92頁、参照)

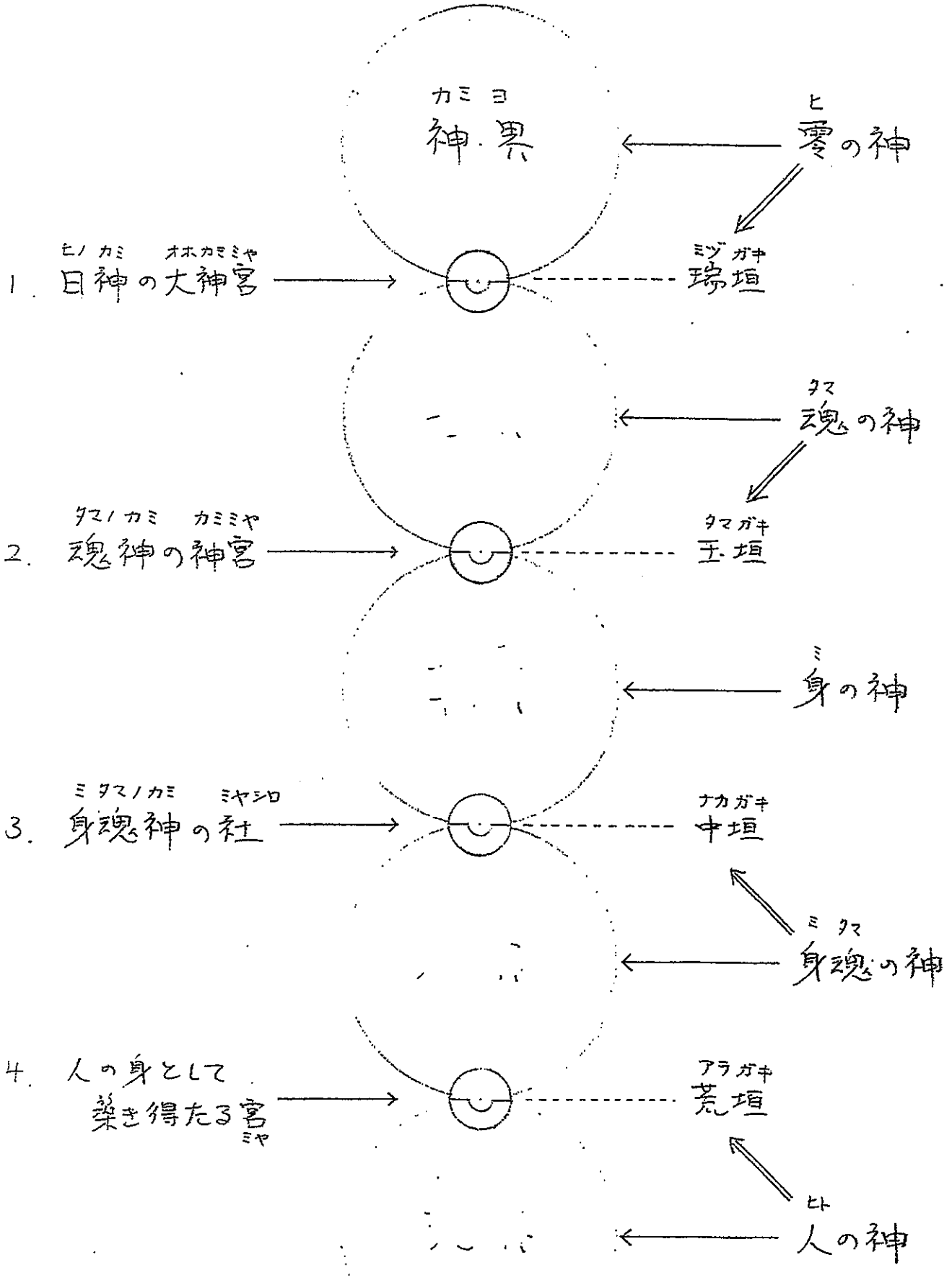


この文脈では、同じ「一(と)」でも、無から生じたばかりの存在であることに力点を置く時には「火」の字を用い、やがてまた無に帰する存在であることに力点を置く時には「日」の字を用いている。

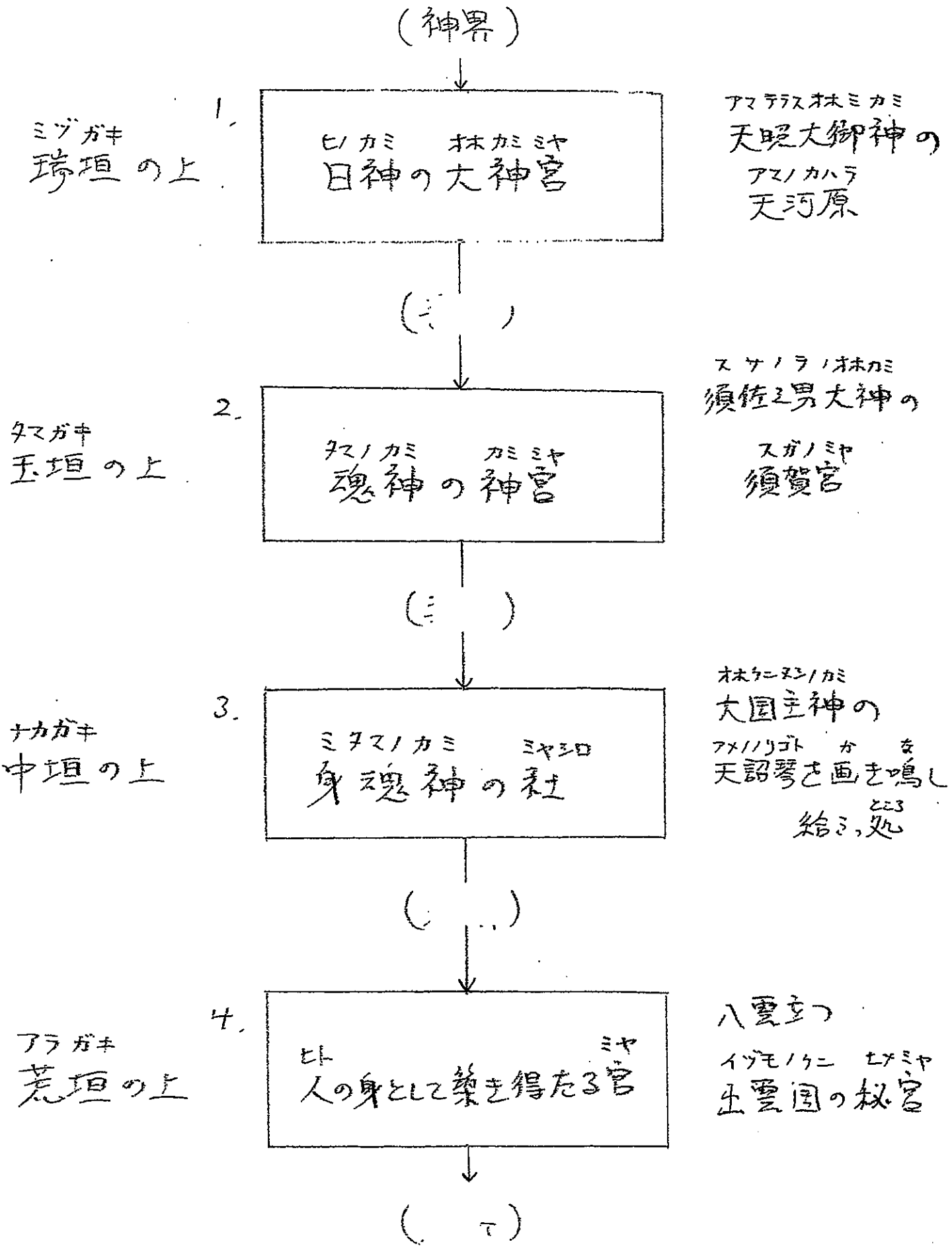
(ファイル(三) 9~10頁、参照)

全く同じ漢字を使ってはいるが、「中心(地)+外郭(火)=全体(日)」という時の「火」や「日」とは、やや意味が異なっているので、注意を要する。

（付図1. 五段階の階層に着目した図）



（付図2．四段階の日隅宮に着目した図）



火神(ヒノカミ)の神徳(カミワ)

アマテラシマシマススメオホミカミ
天照坐皇大御神

作用力

火神(ヒノカミ)の神宮(カミミヤ)

アマテラススメオホミカミ
天照皇大御神

(神界)

1.

ミヅガキ
瑞垣の上

日神(ヒノカミ)の大神宮(オホカミミヤ)

アマテラスオホミカミ
天照大御神の
アマノカハラ
天河原

(奇界)

2.

タマガキ
玉垣の上

魂神(タマノカミ)の神宮(カミミヤ)

スサノヲノオホカミ
須佐之男大神の
スガノミヤ
須賀宮

(幸界)

3.

ナカガキ
中垣の上

身魂神(ミタマノカミ)の社(ミヤシロ)

オホクニヌシノカミ
大国主神の
アメノワゴト カ ナ
天詔琴を画き鳴し
給ふ処(ところ)

(知界)

4.

アラガキ
荒垣の上

人(ヒト)の身として業を積たる宮(ミヤ)

八雲立つ
イヅモノクニ ヒメミヤ
出雲国の秘宮

(荒界)

日本天皇国、6頁の内容を図示

ヒノカミ　カミミヤ
火神の神宮
ヒノカミ　スメ
火神、天照皇大御神

修理固成（すりかためなす）
伊邪那岐命
伊邪那美命　二柱神
なる

ヒノカミ　カミワ
火神の神徳

産出し給へる（修理固成の結果として）

マシマススメ
天照皇皇大御神

（この神名は一般名詞。具体例のひとつが、高木神。7頁参照）

天照大御神

（一般名詞としては「宇宙（万有）の中心」全般を指す。）

㊟ 活用・妙用・神徳（しんとく、カミワ）などはすべて、「作用」ないしは「作用力」を意味する多用用語。

「産霊（むすび）の神（みこと）」も同じか？

（万有を構成する原因）

人もまた、さまざまな要素から構成された実体であり、
それらの要素が結んだり離れたりすることで生病老死が生ずる。
故に、生病老死について正しく知ろうとするならば、
その「構成原因」となっている、イザナギイザナミに
うかがいまつるべきなのである。

二柱神は、実体としては天祖（天照大御神）であり、
修理固成を司る日神（神産巣日御祖命）であり、
作用力としては、天照皇大御神である。

無宇宙における元型

原理として同型

境地

スメ ○ ヒ
天照皇大御神

作用力

マスマスメ
天照皇皇大御神 ⊖

実体

⊙ ヒカリ
天照大御神

宇宙における国生み
(古事記の神話)

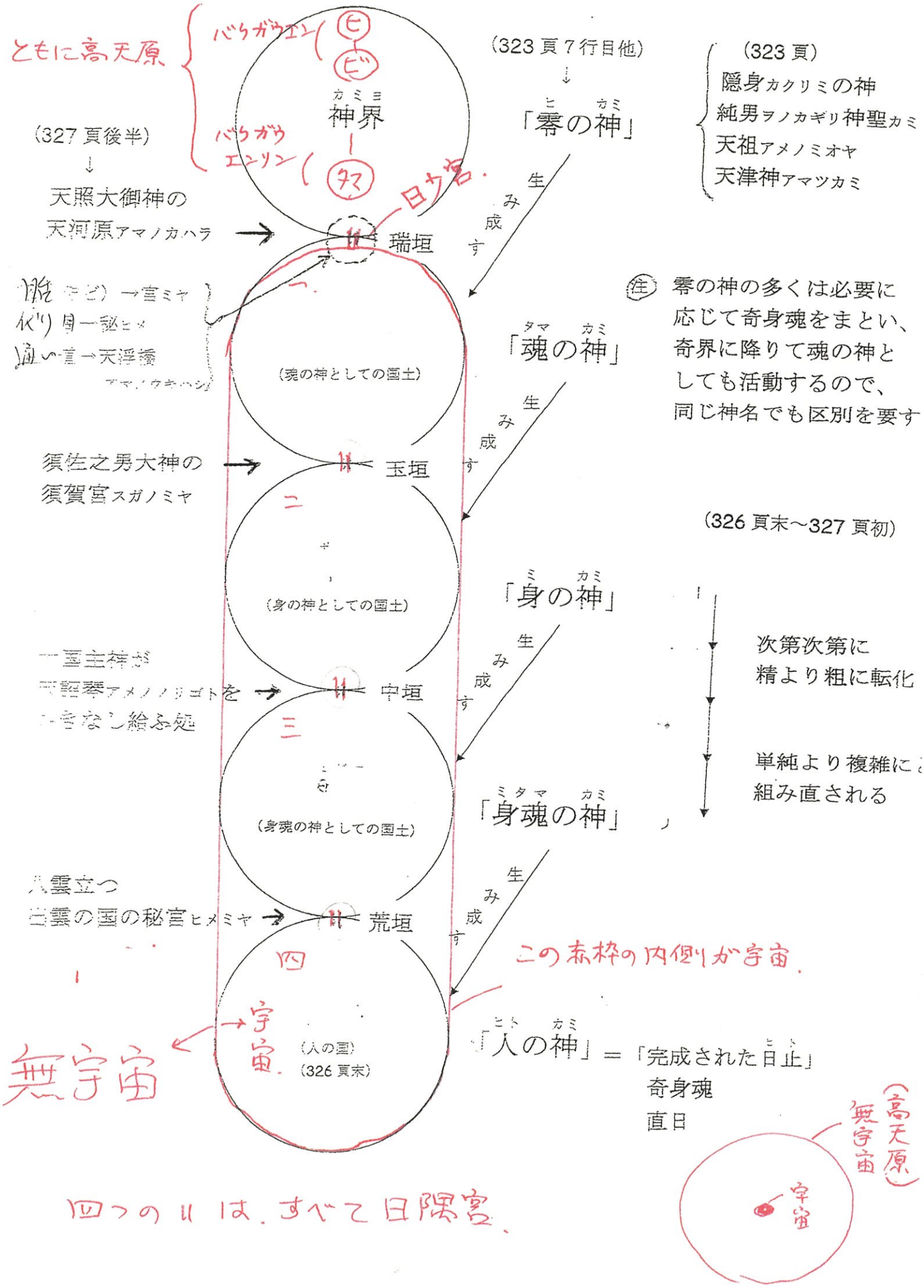
くらげなすただよへる国
(ヒルコ)

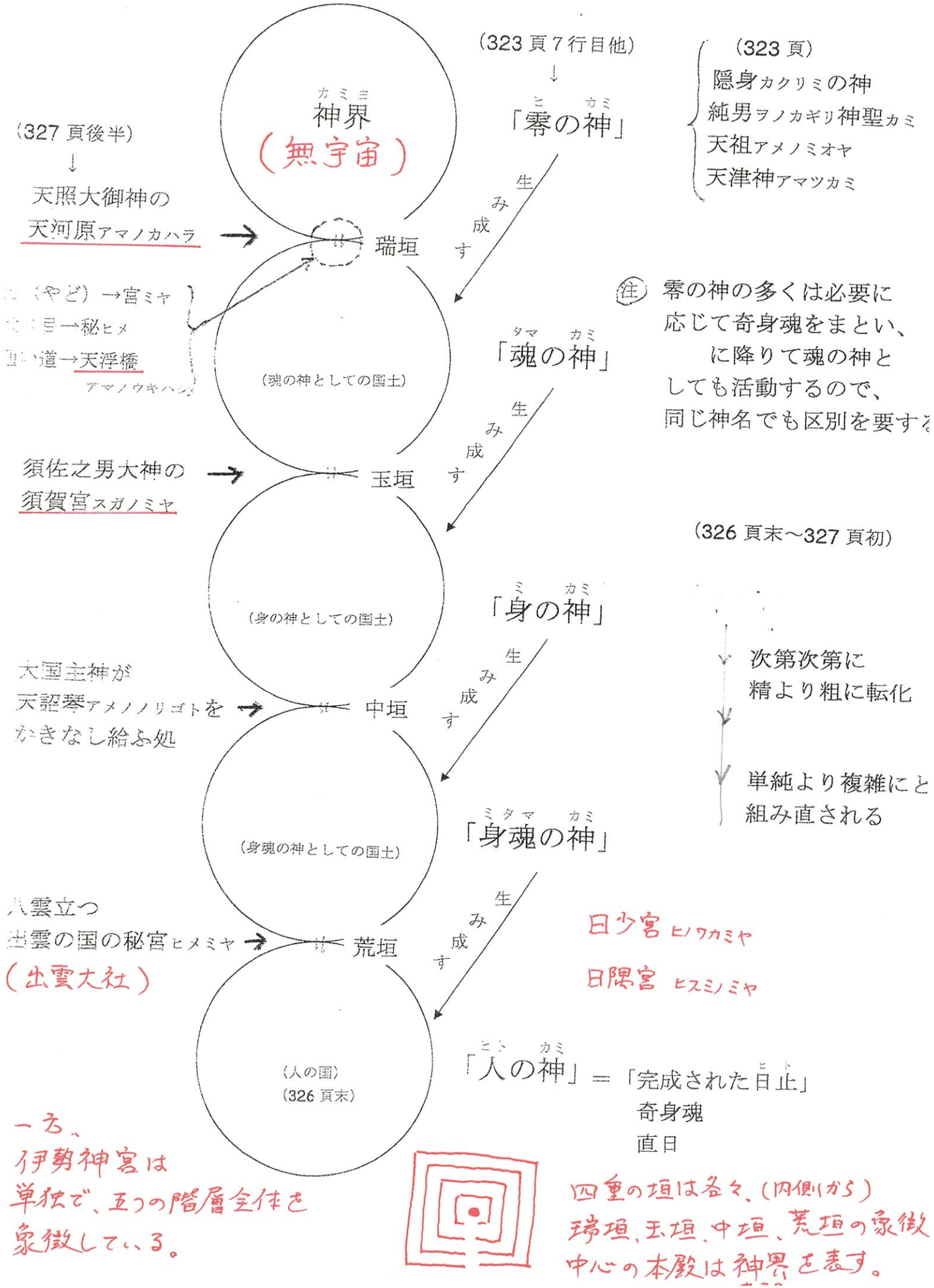
(古事記 53頁〜)

修理固成

イザナギ・イザナミ

14島
35神


ともに高天原
バラガウエン
ヒ
ビ
神界
カミヨ
バラガウエンリン
タマ
(323頁7行目他)
「零の神」
(323頁)
隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマツカミ
(327頁後半)
天照大御神の
天河原アマノカハラ
日ケ宮.
瑞垣
生み成す
(注) 零の神の多くは必要に応じて奇身魂をまとい、奇界に降りて魂の神としても活動するので、同じ神名でも区別を要す
「魂の神」
(魂の神としての国土)
須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ
玉垣
二
(326頁末〜327頁初)
「身の神」
(身の神としての国土)
中垣
三
次第次第に
精より粗に転化
単純より複雑に
組み直される
「身魂の神」
(身魂の神としての国土)
八雲立つ
出雲の国の秘宮ヒメミヤ
荒垣
四
この赤枠の内側が宇宙.
宇宙
無宇宙
(人の国)
(326頁末)
「人の神」=「完成された日止」
奇身魂
直日
(高天原)
無宇宙
宇宙
四つの〃は、すべて日隅宮.


神界（カミミ）
（無宇宙）
（323頁7行目他）
↓
「零の神（ヒカミ）」
（323頁）
隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマツカミ
（327頁後半）
↓
天照大御神の
天河原アマノカハラ
瑞垣
生み成す
（やど）→宮ミヤ
目→秘ヒメ
道→天浮橋
アマノウキハシ
（魂の神としての国土）
「魂の神（タマカミ）」
須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ
玉垣
（身の神としての国土）
「身の神（ミカミ）」
大国主神が
天詔琴アメノノリゴトを
かきなし給ふ処
中垣
（身魂の神としての国土）
「身魂の神（ミタマカミ）」
八雲立つ
出雲の国の秘宮ヒメミヤ
（出雲大社）
荒垣
（人の国）
（326頁末）
「人の神（ヒトカミ）」＝「完成された日止（ヒト）」
奇身魂
直日
注 零の神の多くは必要に
応じて奇身魂をまとい、
に降りて魂の神と
しても活動するので、
同じ神名でも区別を要する
（326頁末〜327頁初）
次第次第に
精より粗に転化
単純より複雑にと
組み直される
日少宮 ヒノワカミヤ
日隈宮 ヒスミノミヤ
一方、
伊勢神宮は
単独で、五つの階層全体を
象徴している。
四重の垣は各々（内側から）
瑞垣、玉垣、中垣、荒垣の象徴
中心の本殿は神界を表す。

十指両掌

多田山谷祕稿

祖神垂示の數理觀は、最簡明に宇宙成壞の事理を教ふるので上來屢々之を借りたが、二十三の完成して一點に歸りたる零を母胎として生れませる神は、第一十五神界の主神と称へまつらるる「天津彦彦火瓊瓊杵尊」にしましまします。

それ故、その御父神「天忍穂耳命」は、葦原中津國に御降臨遊ばされなかったことが判明するのである。

と白すのは、「神代紀」の傳なので、固より人間身のことではない。

人間知らざる奇振岳の祕事である。

そうしてそれも、零（ヒ）の神としての御生誕である。

古事記は、その巻頭に、隱身の神として、日本書紀は、純男として、舊事本紀は、天祖として、各々僅に數言を載せ、次には、魂（たま）の神の御事績が記されてある。

ところで、現存の古典は、まことに不幸にして、神界の事理を知らざる俗學者に流され、零（ヒ）の神と、魂の神と、身の神と、身魂の神と、人畜動植鉱物との判別も無い雜糅混淆の記載と成ってしまった。

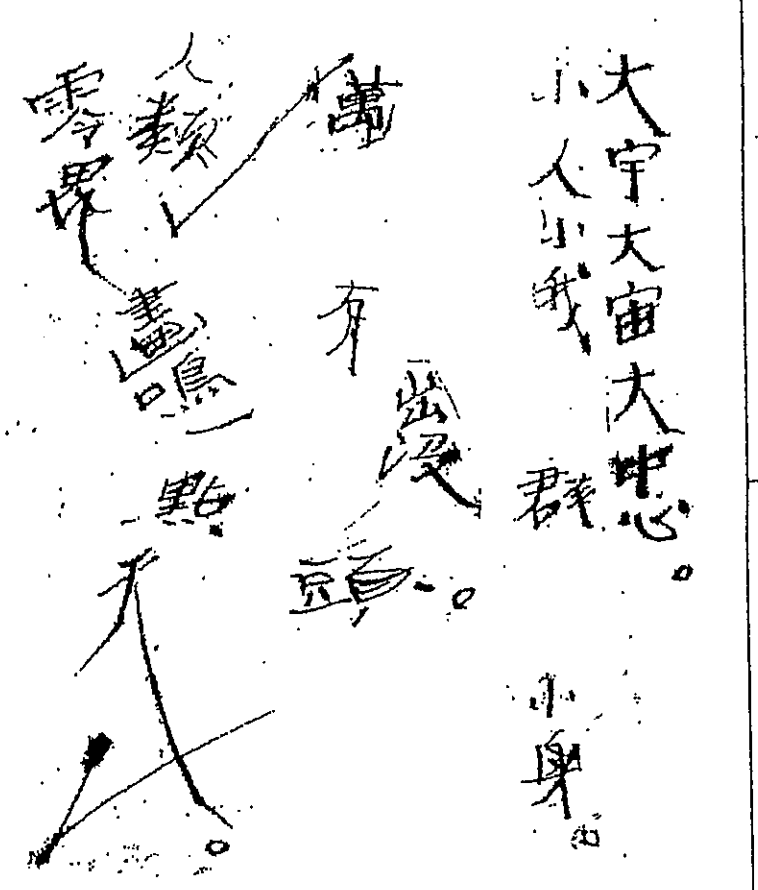
爲に、後學は、全く津梁を失ひ、五里霧中に彷徨するの悲嘆を繰返して居る。

この霧を掃ふに、神の祕事がある。

それを、瓊瓊杵尊隱身の神傳と教へられたのが、現存行事の「散米の祓」である。

祓去り祓來れば、あや奇しくも、「天成り地定り、高天原は成り成る」「その一點を仰げば神聖（カミ）國常立尊である」とは、日本書紀の傳である。

「その一神とは、天祖（アメノミオヤ）天讓日天狹霧国禅日国狹霧尊である」とは、旧事紀の傳である。



山谷多田雄三先聖の筆蹟

「その時の神は、隱身（カクリミ）天御中主神である」とは古事記の傳である。

「並び給ふ神とてはましまさねば、天照大神と称へまつるのである」とは、古語拾遺の傳である。

卒然として之等各々を讀めば各々別々の如くである。

けれども、是の如く、それぞれが皆共に「一」である。

日本語では、等しく之を「ヒ」と称へて、有る限り在らん限り一切合切との意である。

乃、「大宇宙」である。

人天萬類は、各自各自に、大宇宙としての起伏波瀾であることを明らめ得たる時、各自各自分分箇箇としての人天萬類が、そのまま身魂（ミタマ）であり、魂（タマ）であり、零（ヒ）である事實を顯彰して一圓光明の⊙（ヒ）と成る。

各自各自が⊙（ヒ）と成り得たる時、緯（ヌキ）としては神界（カミ）で、經（タテ）としては神代（カミ）で、緯經（タテヌキ）を合せては十（カミ）で、共に「ヒ」である。

之を「日（ヒ）」であり、「日神（ヒノカミ）」であり、「人（ヒト）」であると云ふ。

その「人(ヒト)」とは、「日正(ヒト)」であり、「火人(ヒト)」であることを教へて、⊕(ヒトツ)と描き、田(ヒツキ)とも、⊗(ヒトリ)とも、品(ヒト)とも、呂(ヒ)とも、日(ヒカリ)とも、串(ヒル)とも、串(ヒメ)とも傳へて、呂(カミ)なる示(ヒト)である。

呂呂呂と劃するのは、伏羲の所傳を敷衍したので、「湯」であり「ユ」である。

日本の古典には、「中津瀬」と傳へて、純眞無垢の一點で、中心であることを知らしめてある。

之を「否なり」と呼ぶ。

「そのようなものの有るのではない」との義である。

珍重珍重。

如是の「否」。

如如超越。

怪奇至極。

故に呼んで「神(シン)」となす。

之は、支那人の「兀方」と云ひ、「陰陽不測」と称するところの「神(シン)」である。

世間の學者の中には、此のような「神(シン)」は、日本人所云の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。

[illegible]

の神を忘れようとする。

先聖の教へ遺されたる大道に荊棘を植ゑ牆壁を築いて、神道は民族信仰だなどと呟く。

それだから、偏狭固陋で役に立たない。

その現状を觀(ながむ)れば「何處へ行くのか」と、愁へざるを得ない。

世界人類は、太古の神傳を忘れて、小我の邪見に繫縛せられ相互に鬪争殺戮の惨劇を演じ來ったのである。

魂(タマ)の神としての天照大御神には、之を「かしこしと思召され」て、天窟に挿し隱(こも)らせ給ふ。

「天の下皆闇し」とて、八百萬神は、高御産巣日神の御子の御教を仰ぎつつ、「大祓」を行はせられた。

過去を祓ひ、將来を祓ひ、祓ひ祓ひて、天窟戸の御前に、太祝詞白し、太幣帛捧げまつり、祭りまつれば、あや奇しくも、あや畏くも、高天原は明けて、天照大御神には、天地の在りのことごと、み照し給ふ。

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」と、神の國の完成したのは、「大祓」の神事に依るのである。

それは、「今日よりはじめて罪と云ふ罪はあらじ」と、式の祝詞に記された如く、「速佐須良比咩根國底國の祕神挂」である。

之を、「日本天皇三種神器の神徳なり」と拜みまつり畏みまつる。

◇

數理觀と言靈觀とは、神象觀と相待って、日本神道の扉を開く祕鍵である。

之無くしては、神祕を傳ふることも、行ずることも出來ぬ。

それ故、此れまで難解な説明を續けて來ました。

けれども、之れは、畏くも、日本天皇の神傳と拜承しまつるので、茲に、此の筆録を止めて、「日隅宮(ひすみのみや)」の傳へに移らう。

ヒトミナハ・ウツソミノママ・スミスミテ。ヒスミノミヤニ。スムベカリケル。

伊邪那岐大御神が、修理固成の神業を完成しては、「日少宮(ヒノワカミヤ)に神留りましませり」と傳へてある。

此の宮は、天津神の祕宮で、零神(ヒノカミ)の常宮(ところみや)で高天原とも称へて、無経無緯の高御座で、唯一點たる零である。

亦の名は、大虚空で、零(ヒ)の海で、虚中で、虚天で、天忍穂耳命の神治らすところである。

その御兒神は、その國を出でまして、葦原中津國を、その國の如く治らしめし給ふと、神は教へ給ふ。

色相を以つて之を称ふれば、晃耀赫灼たる一圓光であり、聲音として之を聽けば、琅琅として十方に遍き一音響であり、數としては零なる一である。

人類世界に、神の與へ給へる瑞寶としての「數理」と「言靈」と「神象」とを「天浮橋」に「たより」て、我等凡愚の其のままに、神の國には昇り得るのである。

此の「たより」とは、球と球との接觸面で、點である。

此の點は、幾何學に、「長さも無く幅も無くして位置のみある」と云ふが如きものではなく其の位置としての長さも幅も有るのである。

けれども、人間的に計算することは容易でないから、普通學の範囲には置かぬのである。

球と球との接觸面たる一點は神の祕宮で、天津神と國津神との相交はるところで、成り餘れる一點と、成り合はざる一點との相回り相遇ひて、國を生み出す零(ところ)である。

零で一で、無より生ずる有としては、火と呼び、無に歸する有としては、日と称へ、日少宮と傳へ來ったのである。

之を祕宮とか天浮橋とか称へまつることは、人間身として知り得ざる奇靈（くしび）であるからでもある。

古典に、「天浮橋に立たして望み見たまふ」と傳へたる神は伊耶那岐命、伊耶那美命、二柱神としても、天忍穂耳命としても、いづれも共に、新しき國土を生みなし給はんと、御準備遊はさるる時なので、零（ヒ）の神が、魂（タマ）の神としての國土を生み成す時、魂の神が、身（ミ）の神としての國土を生み成す時、身の神が身魂（ミタマ）の神としての國土を生み成す時、また、身魂の神が、人の國を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと轉化し、或は、單純より複雜に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを、「祕（ヒメ）」と呼び、その胎（やど）を「宮（ミヤ）」と称へ、その通ひ道を「天浮橋（アマノウキハシ）」と仰ぐのである。

そこに拜みまつる神は、「産土神」（ウブスナノカミ）で、その宮を「日隅宮（ヒスミノミヤ）」と称へて、大國主神の神治らすところである。

前に述べた如く、世の大人物を造る道に「ミソギ」の祕事がある。

それは、人の身が、「神の宇氣毘（カミノウケビ）」を得て、此の身此のままに、生を代へるので、その時の此の身をもまた「日隅宮」と称するのである。

冀はくば、我等凡愚の身も、何うか其のようにして、神の都を拜みたいと、

今年六月十二日に、東京を立ち、越後龜田に、幾日かを過ごして、滿州奉天省の熊岳城に來り、十九日から七月四日までの間に、熊岳河のミソギを、滿鐵青年隊幹部等と總員三十三名にて修得。

直に、奉天市に移り、十日夕より十三日正午まで、奉天省地方職員訓練所の滿系職員五十許名訓練の爲に、「ミソギの初門」を執筆。

八月六日、出雲大社教・奉天分院と惟神學社とが主催にて、「敵國降伏」の祕儀を行ずる爲大社教分院に三十三日間滞在。

翌々八日、國都新京に出で、十七日までの間、新京と鏡泊湖畔とにて、鏡泊學園國士神社祭神山田悌一大人等の十周年祭に併せて、學園関係烈士の身魂齋を修し、二十一日、復、新京に來りて、南湖に宿る。

月漸新にして、風また秋である。

此の月の滿つる頃から九月十日まで、大同學院二部生三百二十名に、ミソギの行事を科すると聞き、その日を待ちつつ、八月二十六日正午、之を記す。

大同學院のミソギも豫定の如くに終った。

先に、熊岳河では、木原崇喬氏、大同學院では、生尾哲夫氏が、神壇築成の祕儀を助け、なほ、宇田川氏と、井ノ口、吉田の両氏が、大同學院生の指導を分掌せられ、奉天では、合井氏が、訓練生のミソギ指導を助けられたので、共に、月の神事を行じ得たのは、感謝にたへぬのである。

大同學院では、月神事の後、院葬を享くるものの有ったことを、指導に當られた一人から、今、聞き得たので、神の言を仰ぎ、敬みて、その身魂を齋きまつる。

あなかしこ。

引く汐の月移るまを旅人の何迷ひてや、越えがてにする。

それにつけても、脩禊者は、「宣誓の詞」を忘れてはならぬ。

以上

昭和十九年九月二十三日
秋季皇靈祭日正午

であらう。

此の種子を「日隅宮」に播いて、発芽生育するのを眺め楽しむのは、大国魂の秘神挂りである。

這が秘である理由は、上来略、説き得たと思ふ。若しまた会せざる者も、そのままで、次ぎに進まねばならぬ。言論文章の捕虜と成つてはならぬ。言語文字は、月を指すの指にほかならぬ。指にこだはり、指に囚はれ、指に迷つてはならぬ。筆者もまた、他の謗りを誉とする理由は無い。

第五節　完

第六節

暁を告ぐる太鼓の音は、国の内外に響き、曙の光は、天地を裹む。

大宇宙は一つである。その一つである日隅宮の比売神の大稜威は、世を照し人を導きて、神国浄地を築かせ給ふ。

此の宮を、数理観では、第三十五神界と称へ、三十五の零と教へて、春日比咩（ハルヒヒメ）の神の知ろしめしします「火海（ヒノウミ）」である。

春日比咩の神と称へまつるは、燃ゆる火を取り、光る日の神代を築かせ給ふ三柱の貴子（ウヅノミコ）にてまします。

あなかしこ。

神の代の栄光は涯ても無し。

その慈光限り無し。

烈烈たり。

赫赫たり。
而してまた、
穆穆たり。
ああ。されど、
人の世界は、鬼畜妖魔と離るることを能はず。否、人間以外の六道十界とては在らざるなり。然り。而して、
神、之を
「よし」と宣ふ。
美しさを求め、正しきを願ひ、善きを行はんと思ひ煩ふ人の子を、神また、
「よし」と宣ふ。
善か悪か、美か醜か、正か邪か。唯是、這の存続を願悃希求して燃えに燃ゆるなることをも。神また、
「よし」と宣ふ。
まことに、
這は教にあらず。
釈尊拈華。復、言説せず。
日本神道言挙げずして、神国築成せらる。
之を、第三十六神界主神の秘と称へて、宇宙完成の妙徳なり。大日本天皇国完成の秘儀また這の裡に備はる。
日本古典は、之を伝へて、「天沼矛」と称へまつる。その亦名(マタノミナ)また幾十百千。而して、之また、上来縷述せると

はるひひめ

多田山谷祕稿

行く歳の空打ちまもり我立ては雁の一連西に行く見ゆ。

ゆく人の皆清かれと知るかぎり皆明かれと神ながら神のうけひて神かかります。

他を教化するの難事なるは、自他を了得したる上にて、他の醜悪邪曲なると同一歩調を持しつつ誘導せざるべからざるが爲なり。

於此か禍津毘の行を要す。

禍津毘と共に遊行しつつ禍津日の神業を行ぜざるべからざるものなれば之れを火人と呼ぶ。

妖魔を調伏濟度するは火徳に依らざるべからざるを以つてなり。

之れを祓と称して伊邪那美神の主りたまふところなり。

八種雷にして黄泉醜女にして巫坐黄泉戸神にして、道反神にして道敷神にして、非にして否にして緋にはあらざるなり。

黒色黒光にして陰極にして陽極にして零なる霊にして、○にして□にして、⊗にあらず田にあらず圏にあらず、固より⊙にても⊡にてもあらざるなり。

之れを毘古と呼びて破壊し了りたる毀なり破壊の極なり。

スリにして修理にして、固成にあらざるの固成なるなり。

女の極にして、女罔きの女なれば罔象女と称するなり。

他を教へんとすれば禍津毘とならざるべからず。

之れを三十五となしハルヒヒメと呼ぶ。

ハルヒヒメはその面貌醜悪にして鬼畜の如くなれば、之れを醜女と呼ぶ。

醜女は伊邪那美神の主るところにして伊邪那岐神の投げ棄つるところなれば、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の産出したる天照坐皇大御神天照皇大御神天照大御神にてましますなる天照大御神建速須佐男月讀命にして、月夜見月弓月讀命にして、建速須佐男尊にして、三貴子なり、三重子なり、三種神器なり、八種雷神なり、十種神寶なり。

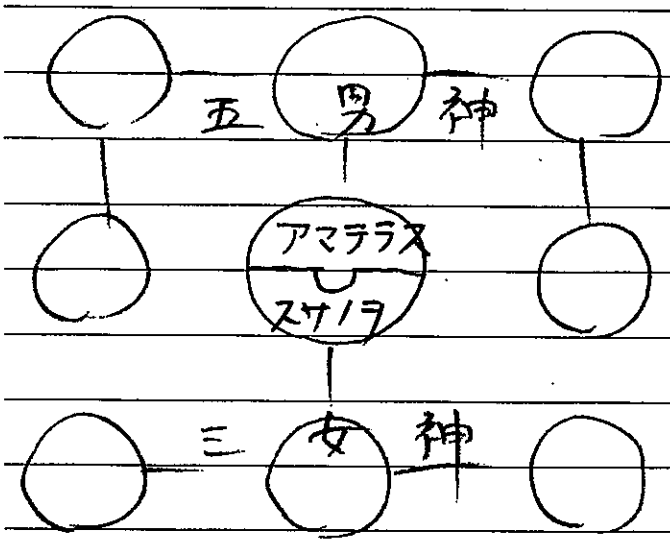
大禍津毘にして八十禍津毘にして禍津毘にして大直日神にはあらざるなり。

大直靈にして八神にして十神にして大食津比賣にして櫛稲毘賣にして少名毘古にして薬師神にして奇靈怪異なる稲倉玉尊なり。

以上

昭和十二年十二月十二日

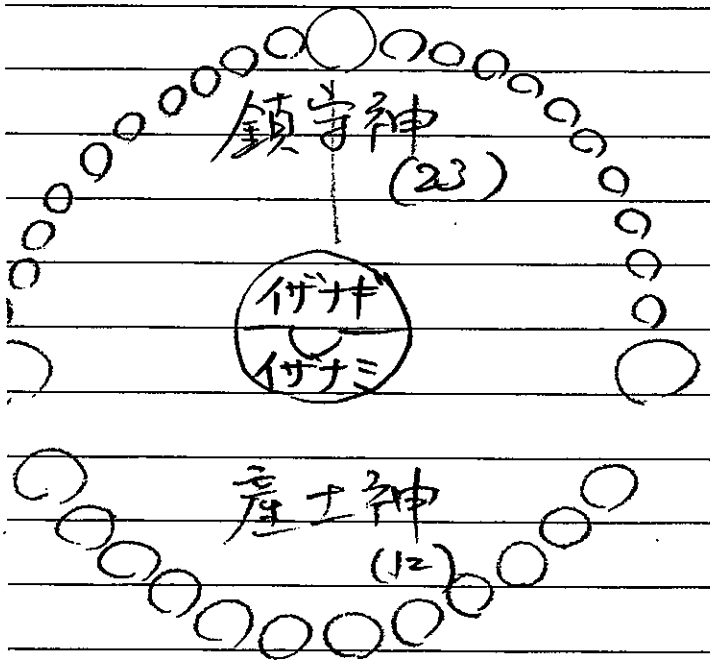
36神界



中心が1
(しばしば 1にして2)

外郭が8
(しばしば ふたつに分かれる)

全体は9



中心 1 (1)

外郭 35 (→ 8)

全体 36 (→ 9)

三十六神界の主神は アメミオヤ 天御 { 造化三神
二柱御祖神
三貴子

NO.

DATE

株 336頁

日隅宮

||

35神界

↓ そこに在るのは

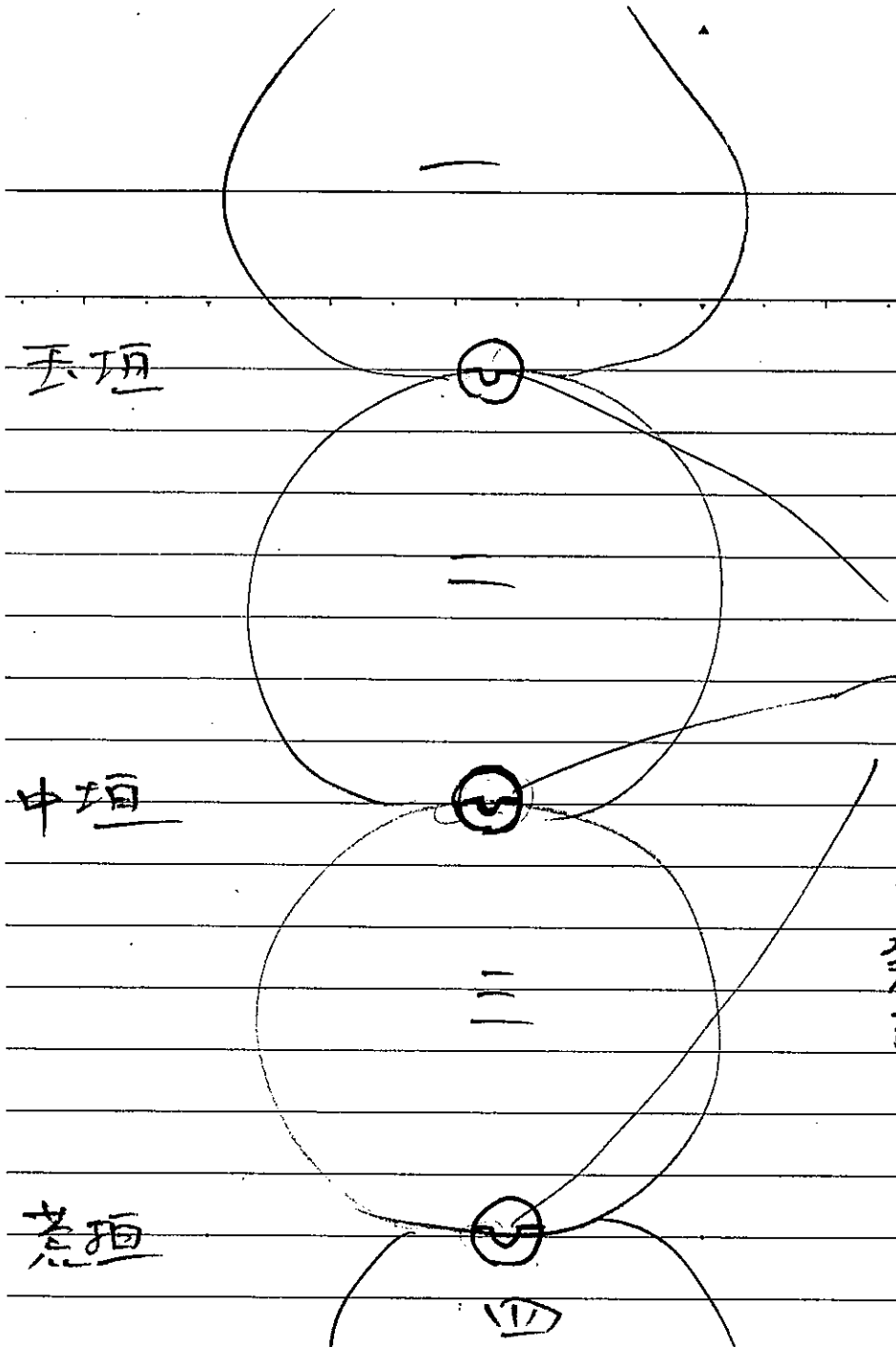
三十五の雫

同じ「雫」の中でも、
日隅宮における「雫」を
特に 三十五の雫 と称する。

↓ それが集まっているので

大海ヒルメ

これを中心として 統治するのは、
36神界の主神である。
(ハルヒヒメノカミ、三貴子)



株336. 日隅宮は 3ち神界である。

特定の事物を別の階層へ移行させる際、

「組み直す」際に、部分的には零にまで

分解して組み直しているので、

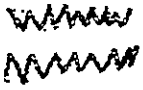
零を直接に取り扱っている以上、

そこは部分的に無宇宙である。

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。
□古にして□□十にして㊥にして凝固の形象なり。
而して結實なり、結晶なり。
産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。
十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團結體を指事したるなり。
之れを兒なり子なり孩なりとなす。
兒は儿なる人の宿るところにして宮なり。
子はかがまりたる人なり。
他に依據するものなり。
孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなりとの義なり。
常陸國に小田と北條との二村有り。
鎌倉時代より今に至るまで相鬩ぎ相争ふて止まず。
北條の水を小田に分たず。
小田、之れが爲に耕耘にたへず。
仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れを八八と云ふ。
母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。
而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。
これをマンコと云ふ。
七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。
之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあちめ。
ああひがてんじんゆうあいこう。
ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。
あすばかすやぞ。さからかすやぞ。
おおおおおおおおおおおお。
ああひがてんじんゆうあいこう。

ヒ
零(一)に内在する原理として、一二三(ヒフミ)があるように、

空零(六)に内在する性質として六七八(むなや)がある、と考えて良い。

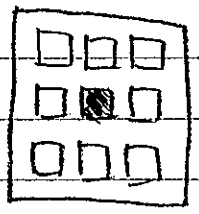
○ヒが二重相としては◎つであるが故に、

それは◎ミとなり、「ヒ零の自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測の〆となる。

母としての〆と子としての〆の離合集散によって、また

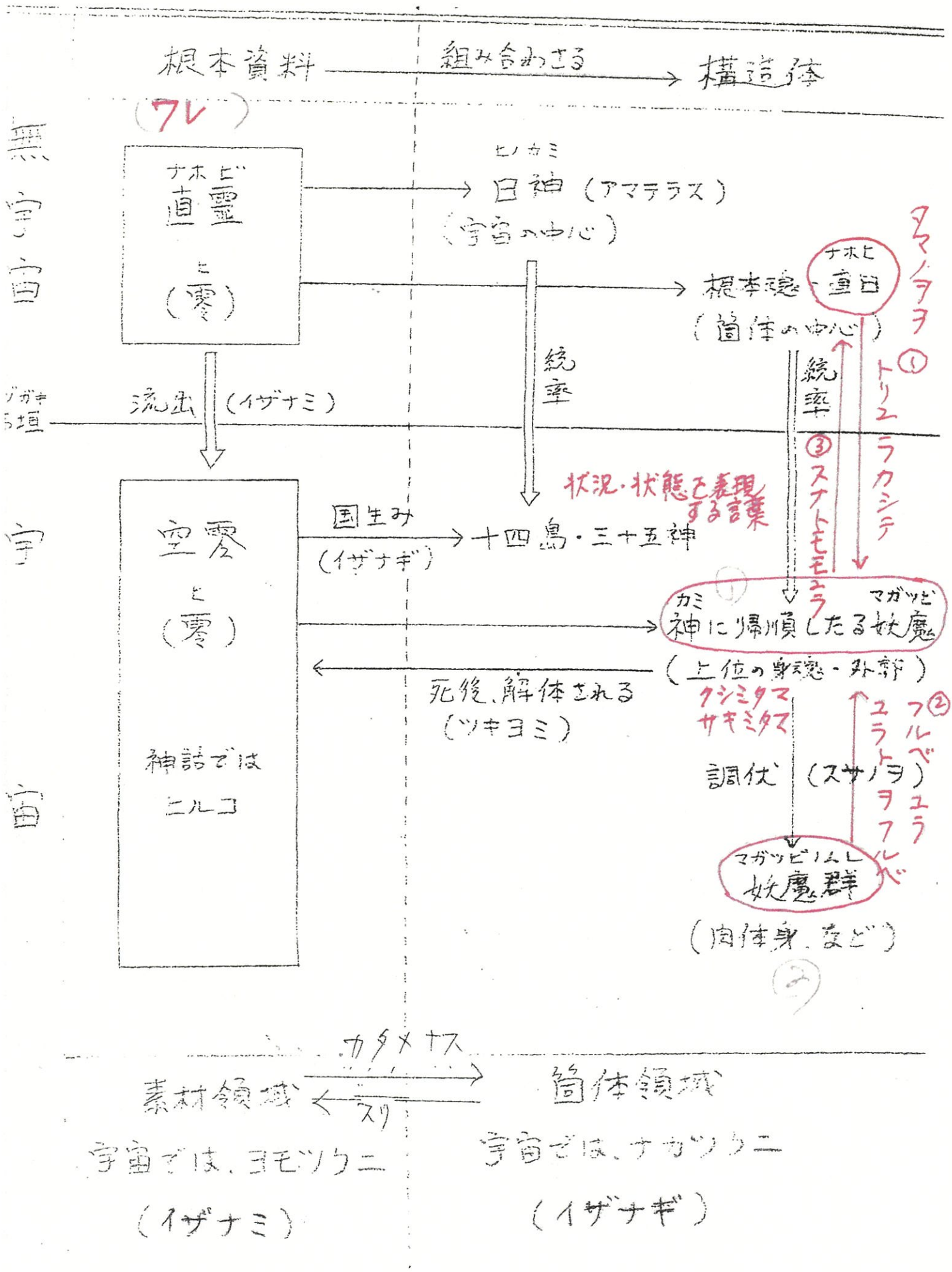
固体が成立する。これが〰〰と描く「七の妙用」である。
(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)
これを一つにまとめて十とする。

直霊と空零


根本資料
組み合わさる
構造体
(フレ)
無宇宙
ナホビ
直霊
と
(零)
ヒノカミ
日神(アマテラス)
(宇宙の中心)
根本魂
直日
(個体の中心)
ヌマノヲヲ
①トリユラクシテ
統率
統率
③スナトモモユラ
流出
(イザナミ)
ゾガキ
ら垣
状況・状態を表現する言葉
宇
空零
と
(零)
国生み
(イザナギ)
十四島・三十五神
カミ
神に帰順したる妖魔
マガツビ
(上位の魂・外部)
死後、解体される
(ツキヨミ)
クシミタマ
サキミタマ
②フルベユラ
ユラトヲフルベ
宙
神話では
ニルコ
調伏
(スサノヲ)
マガツビノムレ
妖魔群
(肉体身、など)
カタメナス
スリ
素材領域
宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)
個体領域
宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

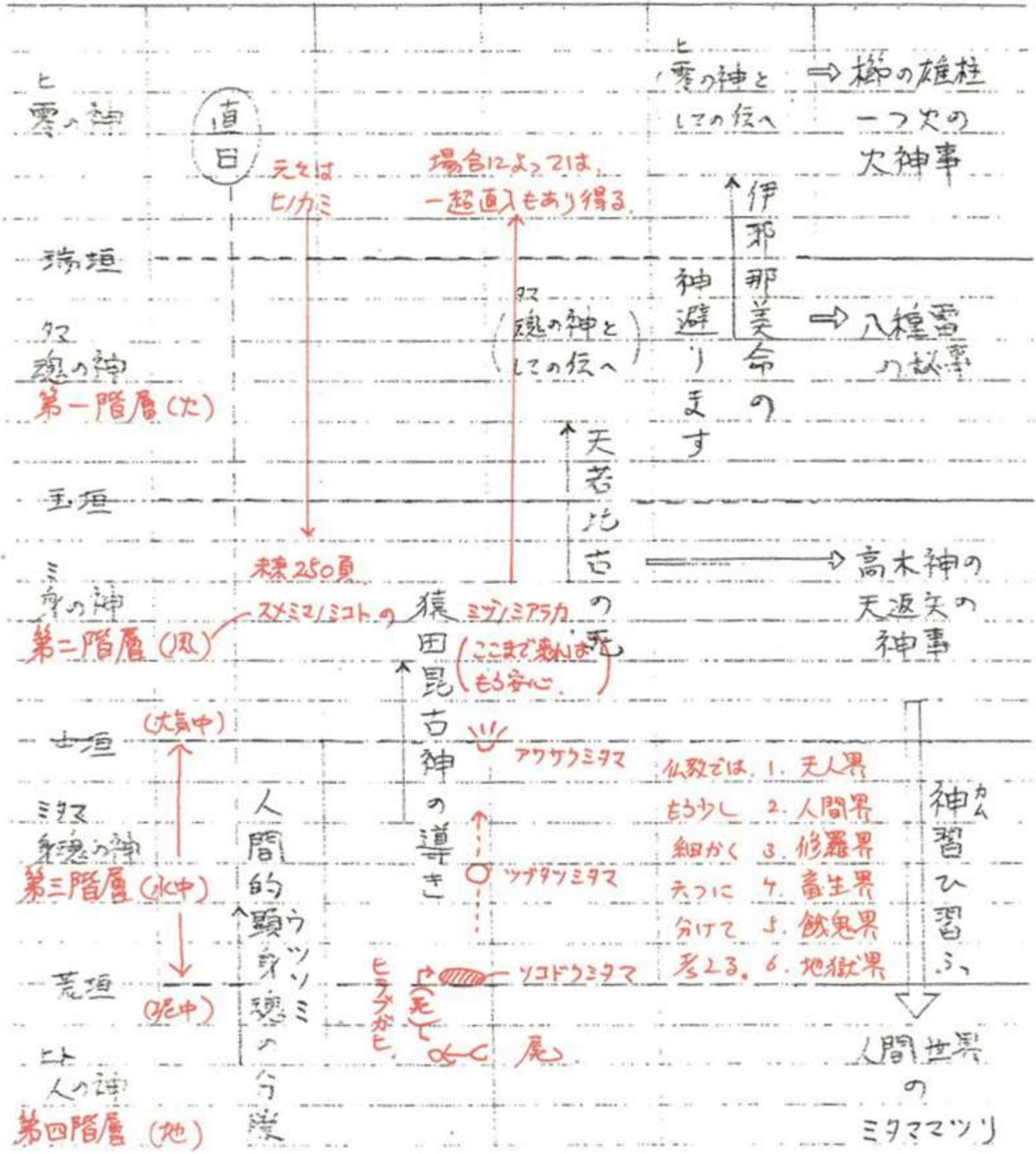
神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。內外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

產土神の神德（ミハタラキ）は、そのまゝ「ハハ」と成り鎭守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾（ナ）が身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、


ヒ 霊の神
直日
元々はヒノカミ
場合によっては、一超直入もあり得る。
ヒ 霊の神としての伝へ
⇒ 柳の雄柱 一つ次の次神事
瑞垣
タマ 魂の神
第一階層(火)
タマ 魂の神としての伝へ
伊邪那美命の神避ります
⇒ 八種雷の秘事
天若比古の天
玉垣
ミ身の神
第二階層(風)
来250頁
スメミマノミコトの
猿田昆古神の導き
ミツノミアラカ
(ここまで来れば もう安心。)
⇒ 高木神の天返矢の神事
(大気中)
垣
アワサクミタマ
仏教では、1. 天人界
もう少し 2. 人間界
細かく 3. 修羅界
大つに 4. 畜生界
分けて 5. 餓鬼界
考える。 6. 地獄界
神習ひ習ふ
ミタマ 魂の神
第三階層(水中)
人間的霊魂の分裂
ウツソミ
ツブタツミタマ
荒垣
(泥中)
ソコドウミタマ
ヒラブガヒ
(天)
尾
ヒト 人の神
第四階層(地)
人間世界のミタマツリ

はてしと神の零ヒ

隱身天之御中主神

高御産巣日神

神産巣日神

はてしと神の魂タマ

天照大御神

月読命

建速須佐之男命

はてしと神の身ミ

皇御孫之命

石長比売

木花之佐久夜毘売

と称へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美

八重事代主

と称へまつるのである。

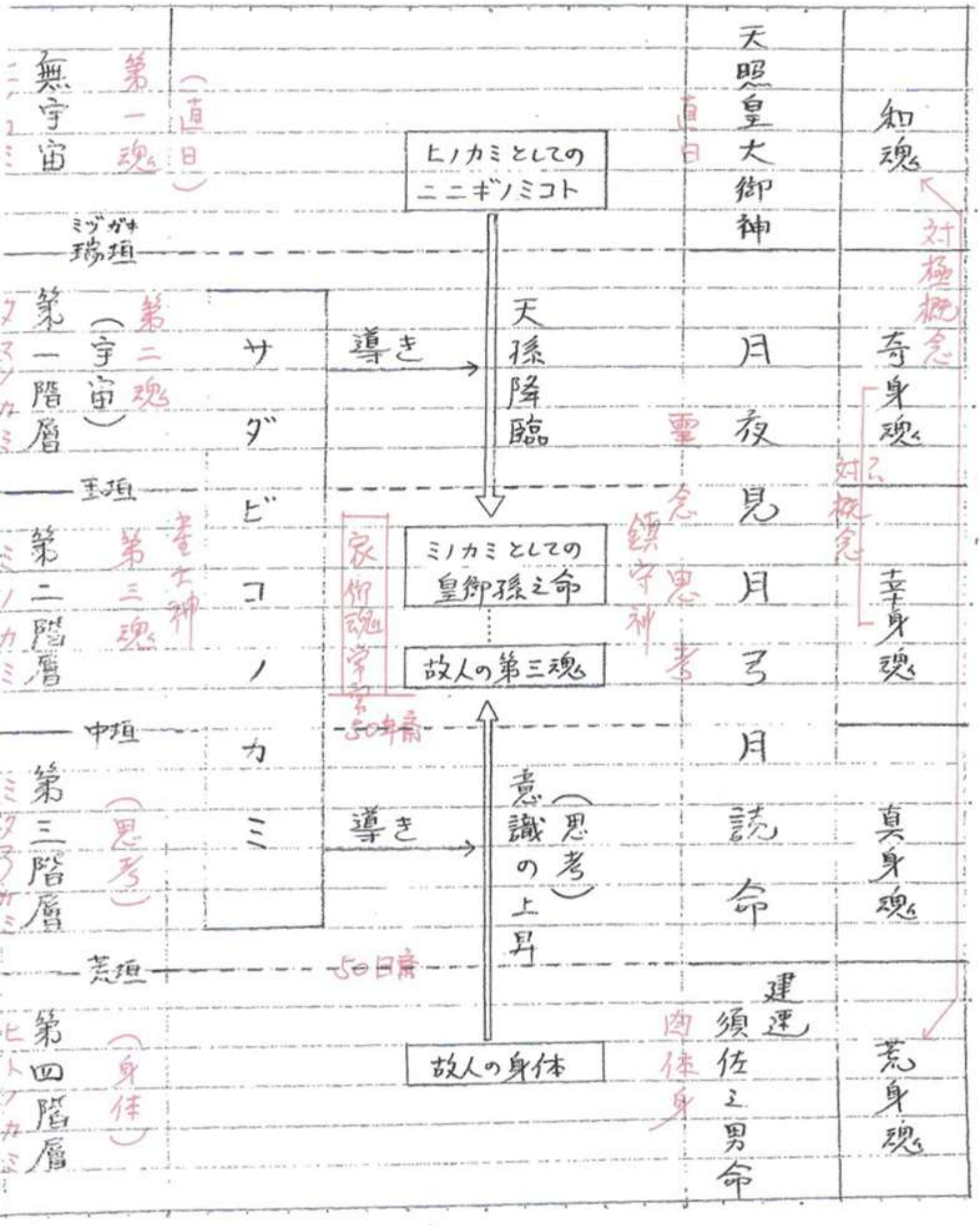
ところがその国は本来神魔包括の◎ヒの神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしましますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてましまし為の活用変化なのである。之を数として見れ

付図．サダビコノカミ の働き．



生身の人間である天皇が、　（ヒトノカミ）
オホヤマトスメラギミとして
機能し得るのは、　（ミタマノカミ）
即位儀礼によって、
スメミマノミコトと一体化し、　（ミノカミ）
その諸力を体現するからである。

「宇宙の側に存在している火」の、背景・根源としての「極大極小の火」 → これが大宇宙全体に作用力として遍満している状態を指して、「天地の火」と称する。

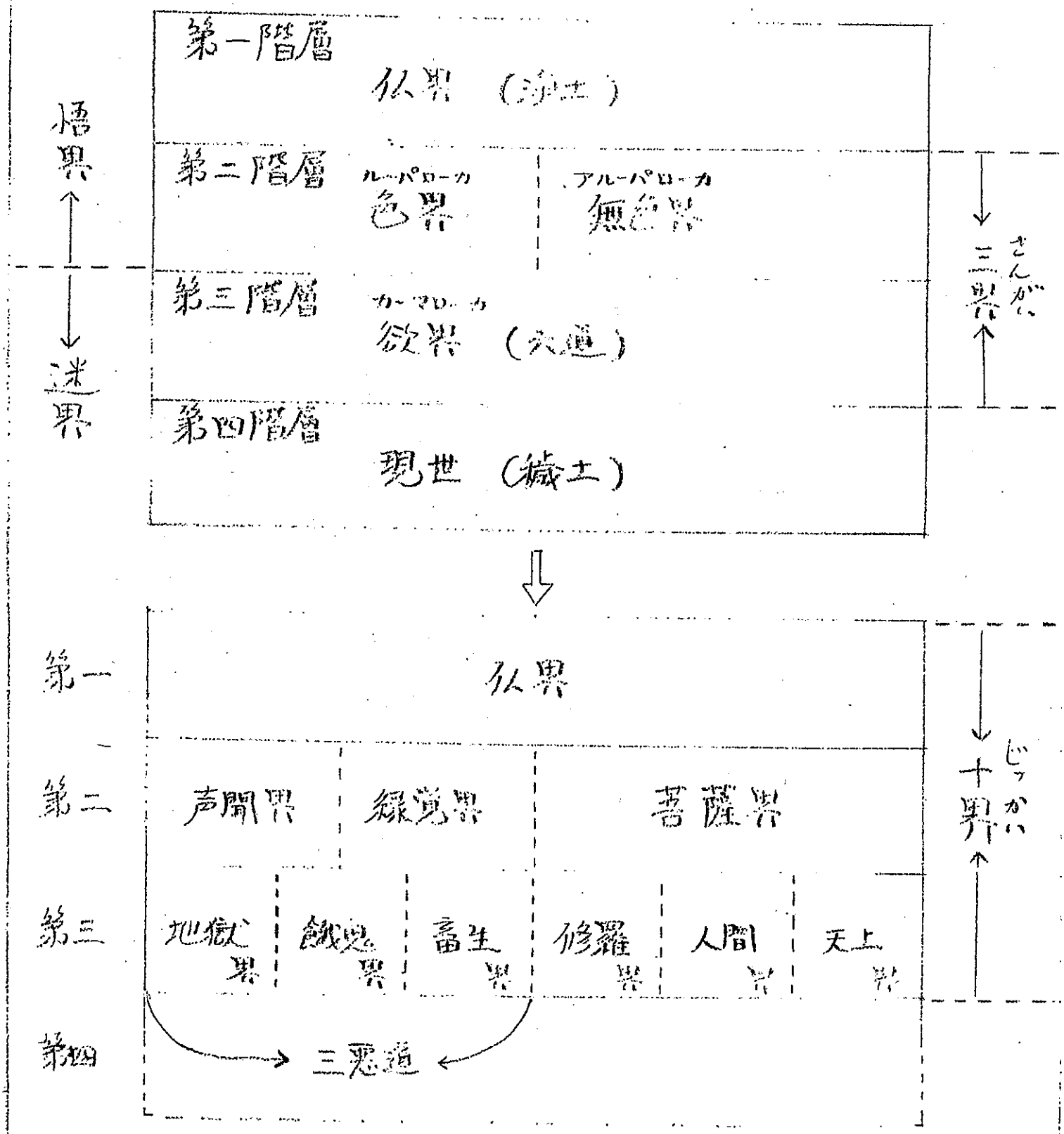
	(多田流)		(西洋流)
アマツカミ	無宇宙	零(ゼロ) ミヅガキ 瑞垣	(真の超越領域)
明瞭に区別			
クニツカミ	第一階層	火(1) とよのあかり	(熱エネルギー)
		玉垣	ここに「断絶」を想定。
	第二階層	風(2) とよのかたし	(気体)
		中垣	↑↓ 相転移のイメージ
人間の領域	第三階層	水(3) とよのみもひ	(液体)
		荒垣	↑↓ 相転移のイメージ
	第四階層	地(4) とよのよね	(固体)

諸外国の思想では、一般に区別されない。

⇒ 唯物論は (4) のみ。
初歩的な霊肉二元論やアニミズムは (3) と (4) のみ。
一般の古代宗教は、(2) と (3) と (4) のみ。
一神教や仏教では、造物主や如来として、(1) をも想定。
日本神道では、さらに (ゼロ) をも考慮に入れる。

未来 40頁

付図 仏教の宇宙観



仏教で言う六道」即ち第三階層（未来45頁より）

1、天人界	
2、人間界	→ 普通の人なら、ミタママツリで「ヒフミヨイムナヤコト」と唱えるべき箇所で、
3、修羅界	
4、畜生界	→ 畜生道に落ちた故人に対しては、「ヒトフタミツヨツ イツムユナナツ ヤヨココノヘノキミガヤビ」と唱える。
5、餓鬼界	
6、地獄界	

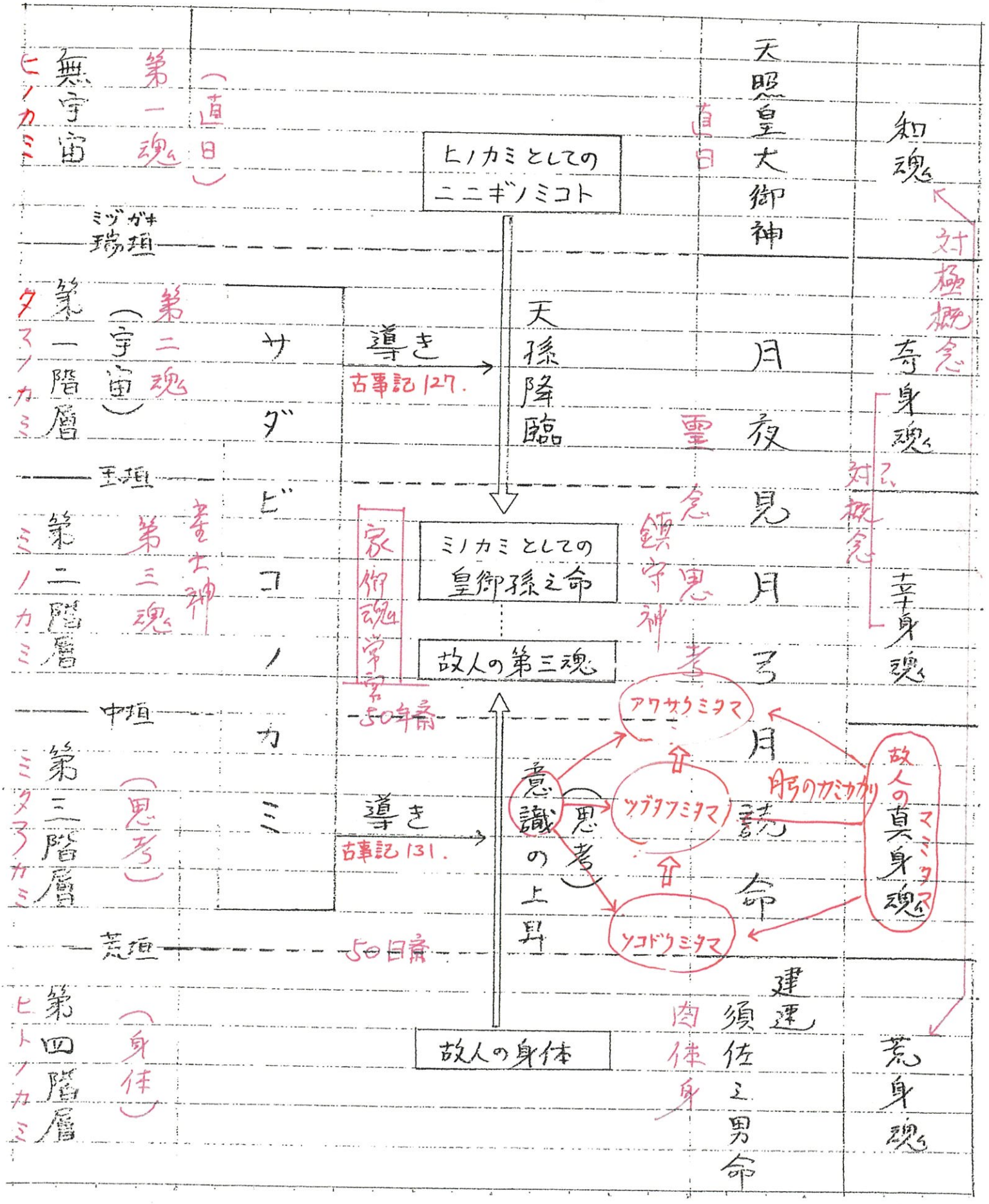
⇩

すべて「故人のミタマの境遇」を表わす用語。

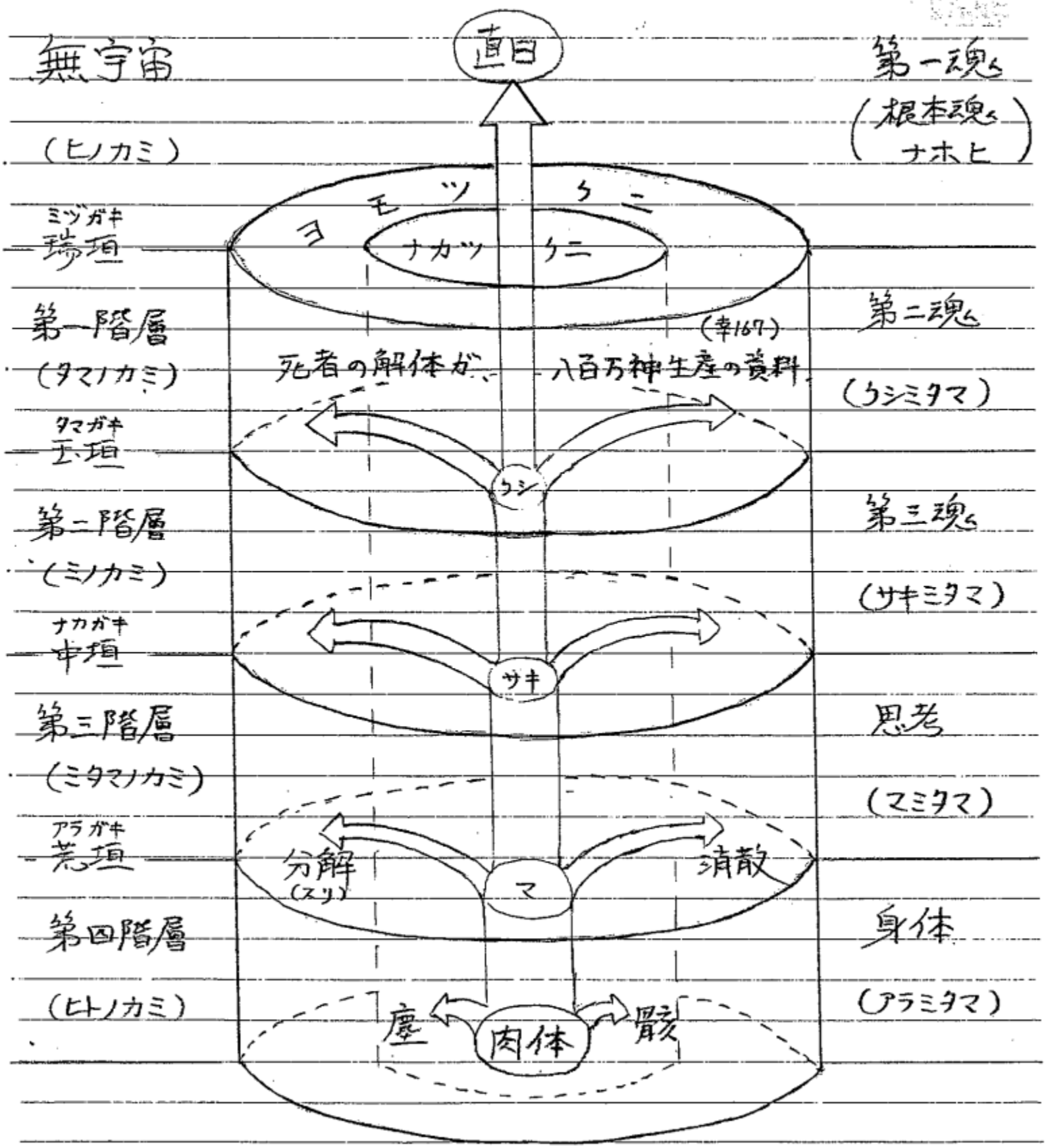
神道では、1を泡ワラミタマ、
2-3を柱ツツミタマ、
4-5-6を庶ドウミタマ、と言う。

まとめて「三悪道」と称する。

付図、サダビコノカミの働き



死者のミタマと月読命の作用（はたらき）



目次へ：日隅宮